

朝鮮交際始末

卷貳

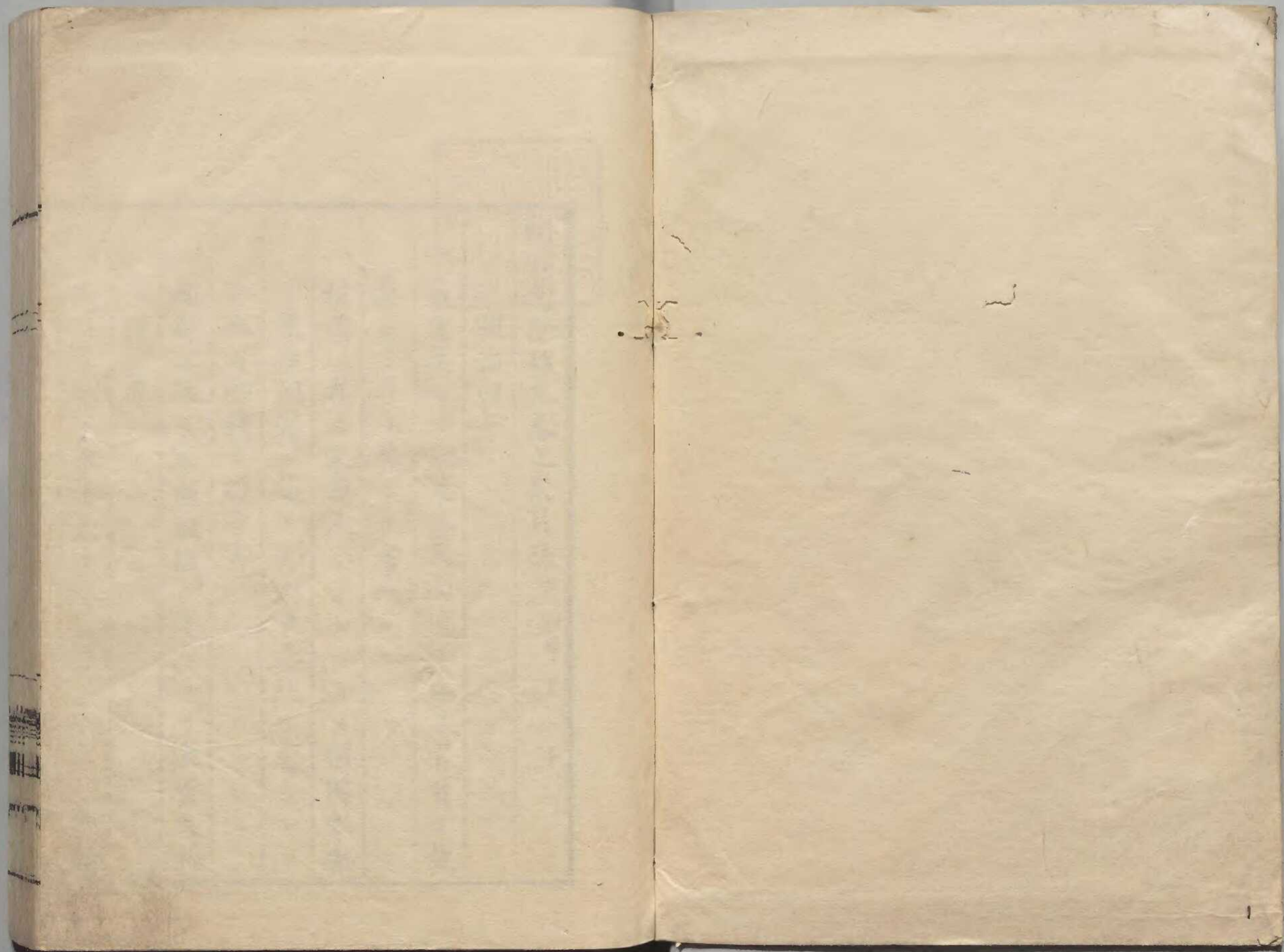
和書門
三二四七一
二二七
一〇
三
冊架函號類

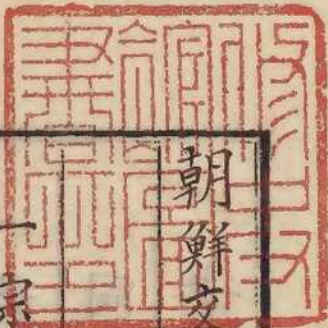
內閣文庫
和書
三二四七一
三
一八
冊架函號類

內閣文庫	
番號	和 31471
冊數	3 (2)
函號	178 495

史一一四







朝鮮文

際始末卷之貳目錄

自四年至六年

明治四年

一 宗重正ヨリ東萊釜山兩使ニ本省官員ヲ款

接セシメテ請フノ書

一 横濱ニ在ル米國人「フル」ヨリ同國軍艦

ニ乗組朝鮮ニ赴クヲ以テ委托ヲ受ケン

シ本省卿輔ニ贈ル書

一同件ニ依テ米國艦隊「ハウス」ヨリ本省大輔

ニ贈ル書

一同件ニ依テ本省大少丞ヨリ「ハウス」ニ回翰

一同件ニ依テ在韓吉岡弘毅等ニ令スル書
 一同件ニ依テ嚴原藩ニ令スル書
 一嚴原藩ヨリ米國軍艦ノ事ヲ以テ朝鮮ニ忠告スルハ當然ト雖モ容易ニ我レニ依頼セサル可シ此時ニ方テ書契上彼レカ忌ム所ノ一二ノ字句ヲ改撰シテ尋交ヲ謀ルヲ本省ニ稟啟スルノ書
 一嚴原藩廳ヨリ米艦ノ朝鮮ニ事アルヲ以テ同國ハ告諭スヘキ旨ヲ草梁館司ニ令スル書

一訓導安俊卿ヨリ東萊府使ノ意ヲ承ケテ兩間ノ事ハ恒規ニ非ル外ハ款接セサル旨ヲ草梁館ニ致ス書
 一朝鮮人漂到スル片ハ清國人ノ漂到スル者ヲ救助スルト同例ナル旨ヲ公布スル書
 一米國公使ヨリ米韓戰爭ノ新聞紙ヲ添へ外務卿ニ贈ル書
 一朝鮮ヨリ米人ニ答ルノ譯書
 一別差草梁館ニ來テ米韓關係ノ談ヲ記スル書

一草梁館司ヨリ米艦ノ事ヲ朝鮮ニ告ケシニ
訓導安俊卿等ヨリ陳謝ノ書

一在韓吉岡弘毅外一人ヨリ宗重正ノ辞表ヲ
聽用シテ直下親接スルニ非レハ談判ノ意

ヲ徹シ難キ旨ヲ本省大少丞ニ啓スル書

一外務卿ヨリ嚴原藩知事ノ將命職ヲ解キ知
事ヲシテ渡韓セシムルノ稟議

一同件ニ依テ外務卿ヨリ三條實美往復書貳
通

一本省遣韓官員ハ支給ノ義外國旅費定則ヲ

照準スルヲ請フノ稟議

一本省卿輔ヨリ朝鮮尋文ニ盡力セシメンカ
為メ宗重正ヲ外務大丞ニ任スルノ稟議

一東萊府使ヨリ本省官負ニ面スルハ規外ニ
シテ為ス可カラサルヲ宗重正ニ答ルノ書

一釜山僉使ヨリ同前

一訓導別差ヨリ同意ヲ以テ草梁館司ニ贈ル
書

一本省卿輔ヨリ在韓吉岡弘毅ハ今般宗重正
ヨリ禮曹參判及東萊釜山兩使ハ書ヲ贈リ

尋文許否ノ底意ヲ問フニ依テ進退處分ヲ
指令スル書

一同前森山茂廣津弘信ニ令スル書

一同同五年

一宗大丞ヨリ本邦廢藩置縣ノ改制ヲ告ル為

メ禮曹參判ニ贈ル書 附譯漢文

一同東萊釜山兩使ニ贈ル書 附譯漢文

一大差使相良正樹渡韓シテ來意ヲ告ル書及

ヒ解疑書 貳通

一假訓導高剛汝ヨリ草梁館司ヘ公韓ノ事ハ

京師ノ回教ヲ待テ返答スルノ書

一本省ヨリ駐韓吉岡弘毅等差出ス所ノ彼國

決答ノ可否ニ依リ護館ノ法ヲ設ケ一旦歸

朝ス可キ意見書ヲ副ヘ上申書

一本省ヨリ談判ノ機ニ依リ吉岡弘毅等ヲシ

テ草梁館ヲ去ラシメ及ヒ同館處分漂民接

待ノ順序ヲ上申スルノ書

一本省ニ草梁館ヲ以テ所轄トス可キ旨ヲ令

スル書

一朝鮮漂民處分ノ義長崎縣ニ令スル書

一 同伴伊万里縣、令スル書

一 同伴宗重正ニ令スル書

一 同伴ニ依テ史官来簡

一 相良正樹深見正景東萊府ニ到リ面接ヲ府

使ニ請フノ書

一 差備官ヨリ東萊府使ノ相良正樹等ニ面接

スルヲ拒ムノ意ヲ表スル書

一 相良正樹等東萊釜山兩使ニ論難スル傳喝

書

一 陪通事ヨリ東萊府ノ意ヲ承ケテ草梁館内

彼レカ建築スル所ノ家屋損破ノ一棟ヲ撤

却スル旨ヲ我傳語官ニ照會スル書

一 外務卿ヨリ朝鮮政府ノ我誠意ニ酬ヒサル

件々ヲ條陳シテ將來ノ目的ヲ達センカ為

メ特別官員ヲ派遣スルノ稟議

一 同伴ニ依テ太政大臣ヨリ外務卿、奉勅書

一 外務卿ヨリ朝鮮語學所ヲ對州嚴原ニ設立

スルノ稟議

一 別差玄大有ヨリ草梁館司ヲ見認サルヲ證

レ代官ニ贈ル書

一草梁館代官ヨリ宗氏負債品償却ノ為メ彼國ハ照會スルノ書

一彼國任所ヨリ差出セシ宗氏負債品目録

一別差玄大有ヨリ宗氏負債品ヲ督責スルノ書

一草梁館代官ヨリ漂民交付ノ為メ彼ハ贈ル

書

一同件ニ依テ別差玄大有ヨリ病氣ニテ来館

スル能ハサルヲ告ル書

一別差玄大有ヨリ漂民領受ノ證書

一外務卿ヨリ支那新聞等ニ朝鮮甚シキ饑饉

ノ情態ヲ揭示スルヲ以テ此機ニ衆シテ周

急ノ策ヲ施シ尋交ノ緒ヲ開クノ稟議

一彼國陪通事ヨリ我周急ノ意ニ答ル書

一草梁館代官ヨリ宗氏未償品ノ查收ヲ訓導

ニ促カス書

一同件ニ依テ訓導不應ノ意ヲ崔在守ニ示ス

書

一外務卿本省判任官在韓中旅費定則外國日

當及着後六十日内支給ノ分ヲ合シテ一日

書

書

書

書

食料ト為スヲ請フノ稟議

同 六年

一 草梁館代官ヨリ漂民ヲ交付センカ為メ訓

導別差ハ贈ル書

一同件ニ依テ東萊府使ヨリ通事ハ傳令スル

書

一 韓漂民草梁館ヲ脱走シ因テ代官ヨリ彼ハ

告ル書

一 脱走ノ韓漂民遺物目錄

一 外務卿ヨリ本省七等官在韓中支給ノ義嚮

ニ經裁判任官ノ例ヲ推ス一ヲ請フノ稟議

一 陪通事ヨリ草梁館ヲ脱走シ韓漂民其蹤跡

ヲ得テ漂民及遺物受領ノ證書

一 森山茂ヨリ宗氏負債品償却ノ為メ東萊府

使ニ贈ル書

附譯漢文

一 宗氏圖書還却ノ為メ同前

附譯漢文

一 宗氏駕船價米ヲ領受ノ為メ同前

附譯漢文

一 東萊府使ヨリ宗氏圖書ヲ領受ノ證書

一同前ヨリ宗氏負債品ヲ領受ノ證書

一 東萊府使僭高ヲ禁スルヨリシテ我ヲ侮辱

一 スルノ傳令ヲ草梁館門ニ揭示スルノ書

一同前潜商ヲ禁スル書

一同前再ヒ我ヲ侮辱スルノ書

一 外務少輔ヨリ朝鮮ニ往來ノ對州商船追テ

高路ノ開ル迄免税ヲ請フノ稟議

一同件ニ依テ大藏卿ノ稟議

一 附長崎縣、指令案

一 外務少輔ヨリ對州ニ在ル韓語學所ヲ廢シ

更ニ生徒ヲ撰舉シ草梁館中ニ於テ修業ス

ルヲ請フノ稟議

一 嚮ニ公布スル所ノ朝鮮人及其船漂着處分

ノ方法ヲ改正スルノ布告書

一 對州ヨリ渡韓船舶風浪ノ為メ彼地方ニ寄

泊シ借リ受ケタル糧米ヲ返却シテ彼ヨリ

受取タル證書

一 慶島縣民ノ朝鮮ニ漂到セシヲ彼ヨリ草梁

館ニ護送シタル問情記

一同前我ヨリ漂民ヲ領受スルノ證書

結

一 同前... 二 同前... 三 同前... 四 同前... 五 同前... 六 同前... 七 同前... 八 同前... 九 同前... 十 同前...

朝鮮交際始末卷之二

奧義制編述

明治四年辛未

○二月重正書ヲ東萊釜山兩使ニ贈リ本省官員ヲ款接セン事ヲ請フト雖モ規外ニ出ルヲ以テ之レニ應セス

日本國左近衛少將對馬守平義達啓書朝鮮國東萊釜山兩令公閣下仲春遙惟僉履清迪曷勝欣慰陳者我邦中世以降軍國之政舉委武門外交之事亦管之今也世運一變朝廷親

裁萬機庶政維新、四方萬國、以禮未者、亦以禮待之、如其禮典條約、總為外務省之所管、而與貴國隣誼之厚、既累數百年、故外務大丞特致書于兩公、謀兩國尋盟之事、委之吉岡弘毅、森山茂、廣津弘信、乃命接晤兩公、叙陳朝廷誠意之所在、頃者側聞、貴國以從前無見外務使負之例、峻拒之、至今未一接之、夫例必因事生、自古未有無此事而先有此例者、前之我邦不設外務省、以掌外交、故貴邦無見外務使負之例、不亦宜乎、今政體既革、外交之事、總管於外務

省、然則其出使於貴國、致本邦之誠信、理勢當然、何足深異、故兩公亦宜款接其使、負聽納其所、其所陳述、不宜引事例之有無相拒也、夫固隣誼敦親好、兩國之福也、若拘々然論事例之枝杪、以失其福、則豈可為善圖乎、不勝區々憂慮之切、敢陳肺腑、萬惟照領、草此不宣、

明治四年辛未二月 日

三月五日橫濱ニ在ル米國セシ、エシ、チブル

クガセツト新書ヲ其海軍中尉ハウスニ托シ

テ外務卿輔ニ致メ云拙生本國ヨリ朝鮮ニ發

航スル所ノ艦隊中ニ加リ以テ其形勢ヲ探偵
 セントス此行ヤ臨機開戦スル則ハ貴政府ニ
 於テ其實地ノ景況ヲ視察スル者果ノ必要ナ
 リ若シ托スル所アラハ拙生宜シク之レヲ辨
 スヘント又ハウス書ヲ外務大輔宗則ニ致シ
 テ一ノ目代ヲ朝鮮ニ派遣スルヲ勸ム因テ大
 少丞ヲシテハウスニ答ヘシメテ云厚意素ヨ
 リ我政府ノ望ム所ナリ則テブルトクニ依
 賴セントス

因云米國派軍艦于朝鮮者曩以其人民遭

下 殘害也

如米國ブルトク來翰譯

以手紙致啓上候然ハ拙者儀朝鮮探索ノタ
 メ發航可致米國船隊中ニ乗組近々彼地ニ
 出立可致候就テハ同國ニテ談判ノ模様及
 ヒ其成果又ハ拙者彼地ニ於テ其國及ヒ其
 人民當今ノ形勢ヲ探索可致候間其模様貴
 國政府ニ於テ御承知可被成事不可欠儀ト
 存候尤多分彼地ニテ抗抵可致然ル時ハ戰
 争ニテ双方用ユル軍勢ノ多寡武器ノ品類

及ニ戰鬪ノ形勢等ヲ知ル事貴政府ニ於テ
是亦必要ノ儀ニ可有之候且貴國ハ昔時朝
鮮ト交戦モ有之又此島ノ南方ハ貴國ニ接
近致シ居候儀ユヘ其政事及ヒ野戦ニ用ユ
ヘキ軍勢ノ多寡其用ユル所ノ兵器類其他
貴國ヲ襲フヘキ船艦等スヘテ其模様穿鑿
ノ儀ハ貴國政府ニテ肝要ノ事務ニ可有之
候拙者右申上候儀ハ全ク信實ノ事ニ御座
候米國船隊長崎ニ此イタシ候同所ヘ出立
可仕候間右事件ニ付何歟御用向有之候得

平洋郵船
長崎左留
大脱
左ハ在カ

ハ此後横濱出帆ノ平洋郵船ニテ長崎左留
米國領事マテ御申遣被下度相願候以上
千八百七十一年第四月廿四日 横濱
外務卿輔閣下

尚々此書ハウス氏ヨリ差上且右事件
ニ付テハ同氏御相談可申上候

以手紙致啓上候然ハ横濱在留フル一ノ氏
儀今般米國ヨリ朝鮮征伐ノ為差向候同國
ノ艦隊ニ乗組彼地ニ赴カント長崎表ヘ發

航致候ニ付同人ヨリ別紙差出候間則致拜
送候且同人儀右使節ノ儀ニ付貴政府ノ別
段ニ内報致候間御用相勤申度旨拙者マテ
申出候將又他ノ各國政府ノ如ク貴國ニ於
テモ事情探索ノ為此機會ニ臨ミ一ノ目代
ヲ朝鮮ノ御差送リ相成候方可然候ハ拙
者兵部省ニ奉職罷在候ヲ以テ敢テ此段忠
告イタシ候且右等ノ時ハ極テ信任スヘキ
目代ヲ差遣候儀各國政府ノ通法ニ有之候
尤ブル一ク氏ニ於テハ貴政府ノ為其任ヲ

盡スヘキ人物ト奉存候依之此段可得貴意
如此御座候以上

千八百七十一年第百廿九日

横濱 米國海軍リユイテアシト
ハウス

寺島外務大輔閣下

大少丞ヨリハウスへ往翰

米國艦隊朝鮮へ赴カントシテ長崎ニ碇泊
セルニヨリブル一ク氏右艦ニ搭附シ彼國
マテ相越シ候ツモリニ付彼國ニアリテ談
判ノ模様動靜等我政府ノ為報知イタシ度
旨以厚意申立候書簡ニ添足下ヨリ我外務

大輔マテ云々御申越右書翰披閱被及候右
ハ此ヨリモ望ム所ニ候間同人ニ依頼イタ
レ度間足下ヨリ可然御頼入有之候様致度
段拙者ヨリ申述候様被命候以上

三月十四日

外務大少丞

ハウス貴下

○同月米艦ノ朝鮮ニ赴クヲ以テ草梁館駐勤吉
岡弘毅等ノ失措ナキヲ要レ速ニ諭書ヲ下レ
且別ニ英語ヲ解スル者一名ヲ派シテ其周便
ヲ建議ス即テ許可ヲ得タリ是ニ於テ乎大藏

省出仕^等安藤太郎^{鳥羽藩士}ヲ同省ニ借リ渡韓ヲ

命ス且ツ譯語其他事ニ臨テ處スルノ方ヲ付

ス將ニ癸ヒントスルノ際タマ、弘信^{廣津氏}

草梁館ヨリ歸ル客歳以来彼ノ情状ヲ陳シ併

セテ重正ヲシテ親ヲ航シ以テ尋盟ヲ為サシ

ムルノ議ヲ獻セントス故ニ直チニ弘信ニ命

シテ太郎ト與ニ渡韓セシム又此意ヲ嚴原藩

州^對ニ令シテ弘毅等ノ議ニ從ヒ蹉跌ナキヲ要

ス

辭令書

吉岡弘毅

森山茂

一今般亞米利加合衆國ヨリ朝鮮國へ應接有
之兵艦差向候ニ付テハ其方トモ心得ノ條
々別紙ノ通り内諭候就テハ其趣嚴原藩釜
山出張ノ官吏ハ勿論同廳へモ此段相達
緩急其機ニ臨ミ不都合無之様可為心得候
事

辛未三月

外務省

内諭

一朝鮮ハ接壤舊交殊ニ方今既ニ官負ヲ派
シテ親交ヲ求ルニ當ル然ルニ其國ニ事
アラントス須ク其法策ヲ盡シ其國ノ危
急ヲ患フルノ意ヲ表シ其害ヲ避ルコトヲ
勸メ以テ皇朝隣接ノ親情ヲ顯ハスヘシ
一米利堅ハ舊交ナシト雖モ既ニ政府ト公
然友誼ヲ結ヒ朝鮮ハ未タ政府ト交友ノ
誼ヲ表セサルニ當リテ公然タル皇朝ノ
所分ニ至リテハ米ヲ助クヘキノ義アリ
テ鮮ヲ救フノ理ナシ故ニ皇朝朝鮮ト友

誼ヲ結ハサルニ先ツテ一旦事起ル時ハ
我皇朝ハ之レヲ傍觀シテ米ノ為ス所ニ
委ネ敢テ之レヲ妨クルヲ能ハス而シテ
米トハ友親ノ誼欠クヲ能ハス
一朝鮮ハ接壤舊交加フルニ先ツテ交リノ
促ス未タ公義ヲ存セサルモ尚私情アリ
米ニ至リテハ公然タル友國加フルニ其
問フ所理アリテ其欲スル所ハ則テ我ト
其正鵠ヲ同フス皇朝ニ於ル兩國ノ關係
是ノ如シ而シテ若シ一方我ニ依以テ其情願ヲ通

修 訓 館

慮原本處ニ作ル
原本一課トスル

スルヲ請ハ、其未タ公然交リナキハ即
チ公然ノ友誼ヲ表セシメ然シテ其間ニ
處シ其請ヲ允スルヲ務ムヘシ若シ然
ラハ謹テ方今宇内ノ形勢ヲ洞察シ普通
ノ公理ヲ助ケ以テ其處置ヲ誤ルヲ勿ル
ヘシ然レトモ亦我皇朝目今ノ形勢ヲ熟
慮顧念シテ務メテ自カラ其間ニ投シ好
シテ其事ニ擔當シ以テ他ノ責ヲ己レニ
招クコト勿レ
一朝鮮當日ノ意米ノ望ム所ト恰モ相反セ

修 訓 館

リ我モ亦米ト交際ヲ欲スルノ義ヲ同フ
ス然ラハ則チ一朝攘外鎖國ノ議決セハ
我モ亦猜疑ヲ免レス其極遂ニ危キヲ招
クニ至リ害アリテ利ナシ謹シテ友國ニ
ハ信義ヲ守リテ他方ニ猜疑ヲ避ケ其危
殆ヲ我ニ招クコト勿レ
一方今ノ形勢一旦朝鮮之ヲ拒ムモ永クコ
レヲ守ルヲ能ハス必スヤ開國セサルヲ
得ス宜シク今ニ慮スルニ將來ヲ熟慮シ
敢テ妨碍ヲ遺スヲ勿ルヘシ

修
館

以上方今米鮮ノ間我皇朝所分ノ大綱ナ
リ汝輩宜シク之ヲ領承シ敢テ其措置ヲ
アママリ後患ヲ招クコト勿レ

明治四年辛未三月

嚴原藩

今般米國兵艦ヲ朝鮮ニ差向候ニ付而者釜
山ニ罷在候役員以下心得方之儀萬事吉岡
弘毅森山茂等ハ相達候條其談議ニ隨ヒ諸
事不都合無之様可心得候事

辛未三月

外務省

同二十三日米國軍艦嚮キニ洋中ニ故フ所ノ
韓民五名ヲ上海ヨリ載セテ崎陽ニ来ル故ニ
之レヲ領レ嚴原藩ニ附シテ本國ニ送還スル
ヲ謀ル

因云本年正月朝鮮國全羅道濟州天靜之居
民五名駕一船為渙事偶逢暴風失針路而漂
流于洋中濱死之際為米國軍艦所救同艦搭
載之以到清國上海而累月養之

同二十八日訓導安俊卿草深館ニ来リ初テ吉
岡弘毅等ニ面ス然レトモ私ニ出テ公ニアラ

ス是レ我象官ノ彼レヲ勸メテ一見ヲ要スレ
ハナリ是ニ於テ我國改革ノ由ル所及ヒ尋盟
ノ基ツク所其委曲ヲ盡シテ言フト雖モ亦為
スヘキアルナレ而シテ彼レ云交際ノ事ハ自
ラ成規アリ宗氏ヲ以テスルニ非ルヨリハ決
シテ答報スヘカラス且嚮ニ貴朝廷政權ヲ德
川氏ニ委レ宗氏ヲシテ交隣ノ事ヲ掌ラシム
外務省ノ外交ヲ管スル猶德川氏ノ如クナラ
ハ則テ外務省亦此レヲ以テ宗氏ニ委任スル
ヲ請フノミト是ヨリ俊卿復タ弘毅等ニ面ス

ル無シ

四月嚴原藩ヨリ米艦ノ朝鮮ニ事アルニ方テ
忠告シテ其功ヲ奏スルハ彼レカ疑團ヲ解ク
ノ後ニ在ル可シ然カラサレハ却テ猜疑ヲ加
ヘテ聊モ益ナキハ必セリ因テ嚮ニ大修使ヲ
以テ大政維新ヲ彼國ニ報スルノ書翰中彼レ
カ諱憚スル所ノ一二ノ字句ヲ改撰シ更ニ此
機ニ投シテ尋文ヲ謀ルノ議ヲ稟啓ス

今般米國使節軍艦ヲ卒シ朝鮮ハ相向候ニ
就而者同國之儀ハ從來御舊交之國柄隣接

之御親情御忠告ニ被及候趣敬承仕候下忍
御尤之御儀ニ奉存候隨而近比僭越之至御
坐候得共右御一舉ニ屬シ當藩氣附之趣別
紙ヲ以申上候條可然御聽容之上何分之御
沙汰奉願候以上

月 日

嚴原藩

外務省

御中

朝鮮者接壤舊好之國柄其危急御傍觀ニ忍
ヒラレス同憂ノ御親情ヲ以テ御忠告ニ及

ハレ候始末其國ニ在テハ深ク感戴スヘキ
理ニ候得共韓人頑固ノ國習従前ノ情態ヲ
以テ察スル時ハ必然種々猜疑ニ涉リ國家
保全之策ヲ以テ初ヨリ皇朝ニ依頼致ス間
敷尤將來ノ形勢愈一戰ニ及韓國力盡キ術
窮リ結局皇朝ニ就テ款ヲ納和ヲ講スルニ
至ルハ自然之勢不待多論候得共韓人悔悟
我ニ托スルノ日遲キ時ハ其禍愈深ク禍深
クレハ米ノ韓ニ於ケル其根據益固フシテ
皇朝ノ不利不可言モノ有リ然レハ韓人悔

^悟悔我ニ托スルノ遲速ハ則目今ノ大關節利
害損益ノ判ル、所ニシテ韓ヨリ我ニ托ス
ルノ速ナルヲ求ムルハ渠ヲシテ速ニ其疑
惑ヲ氷解セシムルニ在リ嚮ニ大政維新ノ
顛末大修使ヲ以テ及報知皇朝ノ御盛意韓
ニ在テ奉セサルノ理ナレト雖モ書契上一
二ノ字句渠ノ忌諱ニ觸ル、ヲ以多々辨論
ヲ費シ歲月遷延使節復命ノ期ヲ得ス昨冬
官員超海親ク皇朝ノ盛意ヲ陳情好親密ノ
交際ニ至ラシメントシテ屢韓人ノ面接ヲ

議スルト雖モ渠舊典ヲ固守シテ其請ニ應
セス官員其情ヲ陳ニ由ラシ然ル中今般米
國ノ一舉ニ投シ我親交ヲ求ルノ公幹ハ暫
ク之ヲ措キ向來米舉動韓ヨリ我ニ托スル
ノ日ヲ待テ我素意ヲ達スルノ外他策ナキ
ガ如シト雖モ表面韓國ニ對セラレ候テハ
米使超海ノ忠告モ一タヒ傳ヘテ足ル我親
交ヲ求ルノ外官員韓地ニ留テ為スハキノ
事ナク大修使ノ如キハ尤淹滯スハキノ理
ナシ嚮ニ米國ノ事件生セサルニ先テ其進

退屢公評ヲ仰クト雖モ朝議何分ノ御指揮
ニ不出今日ニ至リ官員花大修使共空ク滯
韓待ツコト有カ如クニテハ先般獨逸船釜
山浦、碓泊ノ先蹤モ有之果シテ米國通謀
其動靜ヲ被伺候様疑訝ヲ重子折角御忠告
ニ被及候御旨意其詮不相立ニ至テハ將來
ノ御功業ニ於テ其害如何ト苦心仕候隨テ
大修使ノ儀ハ表面宗氏限差渡居候譯柄ニ
付書契改撰忌諱ノ字句相除キ無異議承諾
可致ノ文体ヲ以テ御新政通報ノ應酬相整

候得者御舊好連綿ノ姿ニ至外洋各國ニ被
對候テモ名議正シク今後米韓講和ノ御取
扱ニ至リ十分ノ御強ニト相考候且韓人ニ
於テモ大修使書契改撰ノ儀ハ其望ム所ニ
候得者此公韓順便ニ歸スル時ハ使節ノ淹
滯米國關係之顧念無ク此節ニ至從前之群
疑一朝氷釋致シ自今自ラ皇朝ハ依頼ノ意
念ヲ生シ一舉兩利ノ御處置ト奉存候尤三
周歲ヲ過キ今日ニ至リ書契改撰之儀皇朝
ノ御失體ニモ相當リ候様御聞得之程難計

候得共右者表面宗氏限ノ使節ト韓國懇願
ノ情實此度皇朝ニ於テ御察被下字句枝杪
ノ末論ヲ以テ大体御通信ノ本根ヲ害シ候
ハ朝廷ノ御本意ニ在ラサル次第宗氏ハ御
嚴令ノ御旨趣ヲ以テ時宜應接ニ及公幹多
年ノ壅滯ハ兩國ノ親情貫徹致サバル所ニ
歸シ其責特リ對州ニ任シ候時ハ此一舉ニ
依リ聊御國体ヲ損候儀ハ無之筋ト愚考仕
候是等ノ事實可然御聽容ニ至速ニ何分ノ
御處分奉仰候以上

因云此書原本不明記幾月幾日雖然考
其事實蓋四月上旬乎故此載之

○同月嚴原藩廳ヨリ在韓館司ニ諭書ヲ下シ米
艦ノ事ヲ彼國ニ照會セシム

彼國嚮以傷害亞墨利加商船故目今發揮艦
艦申理前條將有事朝鮮其機如此朝廷鈎覈
其實隣誼之際看係危安深垂軫慮仍差外務
省官員然彼國於本州友好之厚不啻金石豈
有可泛聽之理乎且夫洞察事勢熟慮將來轉
危就安可矣故以右件事由告諭訓別斯速馳

報萊府為宜當者

辛未四月 日 政所

右諭
館司

○同十五日訓導安俊卿東萊府使鄭頭德ノ意ヲ

承々書ヲ草梁館ニ致シテ云事恒規ニ関スレ

ハ說ヲ費スヲ待スレテ行ナフハ然ラサレ

ハ千言万言スルモ徒ニ損シテ益ナキ而已ト

此來肇夏公候連衛平安立シ仰渾區々立

以シ僕近以滯泄委苦私悶ハ向者館守

大廳列ニ立云公幹事之果以大差使館守一

代官三公ハナハシ公幹コウカン立タテ是コト是コト兩使道前ニ衆聞
細稟コト立タテ呼コト外コト如此一般之言ハ屢々煩說
立タテ包コト州コト訓導コト以テ不當コト立タテ已コト吾亦不可問コト答コト之
事也必以訓導之言ハ且答送コト立タテ以テ以テ如
是左錄コト立タテ且コト幸須深諒焉

辛未四月十五日

訓導

大抵三百年交隣以來ハ且義理ハ昭如星日
立タテ己誠信ハ重於金石ハ立タテ以テ一動一靜ハ必
遵恒規ハ立タテ雖欲違劃ハ以テ其能肯從乎ハ
是故且事ハ閱恒規ハ立タテ不待費說ハ而可以行

之ハ且若是不然ハ以テ雖千言萬言ハ以テ立タテ徒
損無益ハ以テ貴國ハ詳知事例ハ立タテ己亦有交
隣謄錄ハ立タテ自初以來ハ且我國ハ只遵約束
而已有何違式之事乎ハ大修使書契事已過
四年外未得復命故且更為酬酢ハ立タテ以テ
以テ此公幹事体ハ是非不知ハ且列コト於我國情ハ
以テ小順受コト立タテ是事由ハ且屢次說陳ハ立タテ且
其情意ハ不肯立タテ己更為規外之談論ハ且
且亦惹コト公幹之端乎ハ竊為慨嘆者ハ且凡係
交隣事務ハ且皆自貴島ハ且主管往復ハ立タテ且

舟船等困難漂着ヲ見受候ハ、相當扶助
イタシ模様取糺其船修ヲ加ハ候ハ、歸
國ニ出来可申程ニテ衆組人モ其旨相願
候ハ、望ノ通り承リ届ケ親切ニ世話シ
可申事

但諸雜費ノ儀當人弁スル不能ハ其土
地ノ入費又ハ其管轄所ノ公費ニ相立
可申事

- 一 朝鮮國ノ船同斷ノ節同斷
- 一 清國ノ船破碎漂着難用立候ハ、同國ヨ

對リ長崎縣ニ總代ト唱ハ候モ、同國人取
締ノタメ渡来イタシ居候海陸便宜見計
サヒ藩縣送リヲ以同所縣廳ハ送届縣廳ヨ
テ右總代ハ引渡可申事
一 朝鮮國ノ船同斷之節戊辰六月中御布告
之通可相心得事

○五月三日米國公使デロング新聞紙ヲ副ハ書
ヲ外務卿_宣ニ致シテ米韓啟蒙ノ景況ヲ報陳
ス故ニ同卿其譯本ヲ附シ書ヲ嚴原藩知事_重
ニ投ジ此時ニ方テ尋交ノ事務一層盡力以テ

成功アラシキ事ヲ諭セリ外務卿書畧之

以手紙致啓上候陳ハ米國軍艦朝鮮出進ノ事ニ付落手イタシ候新聞御約束ノ趣モ有之拜送候間御落手可被下候朝鮮人我カ軍艦ニ来リ首府ニ赴ク事并測量ヲナスコトヲ諾シタルニヨリ其事ヲ始ントヒシ時突然我小船ヲ砲撃シタレトモ悉ク散乱シ我方ニテハ死亡ノモノ二人傷ヲ負タルモノ数人ナリ而シテ右小船ハ本船ニ歸リ水師提督口ツゲエルスハ電信機ニテワシント

ン府ハ其顛末ヲ報シ以テソノ命令ヲ相待候由ナレハ多分戦相始リ候事ト奉存候委曲ハ新聞紙ニテ御承知可被下候頓首
第六月二十日

澤宣嘉閣下

朝鮮新聞 千八百七十六年第六月十二日上海ニテ出版

去月中合衆國ノ軍艦コロラトト水師提督三艘長崎ハコルレモノカシ。パロス。ノ衆ル三艘長崎ハ向ケ出帆同所ニテバニシヤ。アラスカノ二艘ト會シ以上五艘ノ舟第五月十六日同

所ヲ進發シ二日路ヲ經テ朝鮮ノ南ヲアル
リールスアイラレツト云ハル島々ヲ見掛
ソレヨリ西ノ方ハ押廻レ同廿日朝鮮國ノ
内ゼロームゴルフト云ハル入江ニ到着其
後十日ハカリハ島々ノ間ヲ測量シ佛蘭西
製ノ海圖ニイレボイセートシルンケル場
所ヲハ碇泊場ト定メ舟々此所ハ錨ヲ下シ
ケル間モナリ一艘ノ船陸ノ方ヨリ漕来リ
次第ニコロラド一船ノ側ニ近寄ルヲ見レ
ハ官服ヲ着タル人三人許ソノ船ニ衆組居

備
用
館

タリ我船ヨリ一等譯司兼九江海関ノ監督トルウト
云ハル人其船ハ到リ暫時應接ノ内三人ノ
官人申ケルハ我々ハ國王ノ命ヲ受ケ貴國
軍艦渡来ノ次第ヲ尋ニ来ルナリ譯司對テ
然ラハコロラド一船ハ来リ給ハ委細ノ事
ハ同船ニテ物語リ申スハシトテ三人ノ官
人同道ニテコロラト一船ハ来リ其趣公使
提督ハ申入シカ何レモ官人ハ對面ノ儀相
斷リ譯司ヲ以テ申通セラレケルハ我々兩
人ハ面會セラレントアラハ國王ノ名代人

修
史
館

ヲ差越サルハ足下等ハ國王ヨリノ委任
ヲモ所持シタマハ子ハ何分對面ノ儀ハ相
叶不申依之一應立歸リ此旨貴國政府ハ申
立給ハ尤今度渡来ノ次第ハ別儀ニテハナ
レ貴國ト好ミヲ通ヒンタメナレハ貴國ヨ
リ事ヲ起シ給ハスハ我々ヨリ決シテ害ヲ
加ハ申スマシク穩ニ歸帆イタスヘシ唯望
ム所ハ國王カ又ハソノ名代ノ人ハ面會イ
タシ兩國ノ間ニ和親ヲ結ヒ度マテナリ就
テハ先乗組ノ内數人ヲ遣ハシ河水ノ淺深

ヲ測量イタサセ其上ニテ王城ハマカリコ
レ申度尤今日ヨリ二日ノ間ハ測量ニ取カ
リ申スマシク其内ニ近隣ノ諸民ハ軍艦
渡来ノ次第ヲ布告シ能々人心ヲ安ンシ給
ヘト申述ケレハ三人ノ官人申ケルハ先々
渡来ノ次第承リテ安堵セリ測量ノ儀此方
ニ於テ一向差支ノ筋ナシ此儀苦シカルマ
レト申述皆々引取タリソノ翌日即第五月
三十一日又々外ノ官人提督ノ船ハ来リ二
時ハカリシテ立歸リヌコノ日船中ハ来リ

官人ハ都合八人ニテ相應ノ人柄ト見
ケレハ船中不殘見物サセシニ船中ヨリ立
出ルトキニ譯司ハ申ケルハサテサテ武備
ノ嚴重ナルコト深ク驚入タリ殊ニ懇切ノ
取扱ヲウケ大慶ノ至リナリトテ皆々暇ヲ
告ケ立歸リケルサテ右ノ官人ハモ測量ノ
儀如何アルハキヤト尋ケルニコレマダ苦
シカルマジトノ事ユハ今ハ心安シサラハ
約束ノコトク明日ヨリ測量ニトシカハル
マレトテミナ^{ニテ}ノ用意ヲナシヌ明レハ第

六月一日ヨリ蒸氣仕掛ノ小舟四艘ヲ卸シ
コレニ十二弁ノ大砲一門ツ、ヲ備ハ艦將
フレキヲ頭トシテ總勢百五十人右四艘
ノ小舟ハ打乗リ陸ノ方ハ出行タリコレヨ
リ少レ下リテモノカレ。パロス二艘ノ軍
艦出行タリコレハ四艘ノ小舟ヲ警固ノタ
メ也サテマダ提督ヨリ頭立タル人々ハ申
達セラレケルハ今日測量ノ場所ハ佛蘭西
製ノ圖中ニフリウフデセルト云ヘル河ヨ
リ取カ、リ究メテ精密ニ測量シ成ルタケ

備
用
館

備
用
館

無事ニ引取ラレヨ萬一彼方ヨリ手出シ等
イタシナハ味方ノ防禦ヲ專一ニシカマハ
テ敵ニ打勝シトオモフハカラス又敵モシ
守ヲ捨テ退クトモコレヲ追フテ陸地へ上
ルハカラスコノ事固ク守ルヘシト申付ラ
レタリ
斯テ四艘ノ小舟ハ本船ヲ出テ四里マイルハカリ
モ来リシニ河口ニ近ク一ツノ小島アリコ
ノ島ノ上ニ臺場ヲ設ケタリ此所ヲ通リテ
猶三里ハカリ河上来リシニ又一ツノ臺場

備前守 備前守 備前守

元師本ノマ、
元帥カ

アリ此ニケ所ノ臺場ハ何レモ石造リニテ
千八百六十六年佛ト戦争ノ後築キシモノ
ト見ハタリソレヨリ又二里ハカリ行テ圖
中ニ難所ト記シタル場所アリコノ所ニモ
臺場アリテ大砲ノ数四五十門ホト備ハタ
リ此臺場ノ上ノ方ニ一ツノ丘山アリ其頂
上ハ平坦ニシテ直徑四十尺ハカリナルカ
周圍ニハ六尺乃至八尺ノ胸壁ヲ築キ中央
ニ元師ノ二字ヲ漆板タル黄色ノ大旗一流
ヲ押シ立火繩筒ヲ携ハタル兵卒共貳千人

備前守 備前守 備前守

ハカリヒシヒシト固メ居タリ斯ク仰々シクウチカマヘシハ全ク武威ヲ以テ味方ノ者ヲ驚カシ早々退去セシメントノ結構ナラシメサリナカラ先ノ日我カ船中ニ来リシ官人ノ話ニ測量ノ儀ハ苦シカルマシト申セシカハ何條事ノアルヘキヤトテ次第ニ河上ノ方ヘ沂リ河水ノ曲レル所マテ来リシガ此所ニモ又一ツノ臺場アリケレハ其模様ナド見居タリ折シモ一聲ノ砲耳元ニ響シカハサテハ敵ニ害心アリイサ用心

修史館

セヨト云フ間モナク右合圖ノ砲聲ヲ聞クトヒトシク元師ノ牙營ヲ始メ其外ノ臺場トモヨリ我カ小舟ハ對シ會釋モナク散々ニ大砲ヲ打掛ケレハ左右ヨリ飛ヒ来ル彈ハ霰ヨリモ繁ク面ヲ向クヘキ様モナシカクテハ一人モ命助カルモノアルマシト思ノ外手疵少々ウケシモノ終一人ノミ實ニ不思議トイフヘシアラスカノ艦將フレーキトイヘル人ハ先年南北合戦ノ折度々苦戦ヲモナシタル人ナリシカ斯ル烈シキ砲

修史館

火ニ出會レハ今日カ始メテナリト申サレ
キコノ時四艘ノ小舟ノ内一艘ハ四里ホト
モ河下ノ方ニ後レタリシカハ残り三艘ノ
小舟各々ソノ船首ヲ臺場ノ方ニ押向ケ思
フマ、ニ破裂彈ヲ打出シタリ暫クシテパ
ロス。モノカシノ両船ヨリモ八インケノ
破裂彈ヲ打カケ臺場ノ胸壁數ヶ所ヲ打碎
キス凡十五分許リ過キラ敵ノ砲聲モ絶ハ
烟晴レシニ敵ハ防戦不叶皆々臺場ヲ打ス
テ樹林ノ間ニ逃ケ入リシト見、今ハ臺場

ノ上ニハ人影モ見、ス元師ノ牙旗ノミ空
シク残り居タリソレヨリ樹林ノ中ニ破裂
彈ヲ少々打込ミシニ何レモ思フ的ニ中リ
レト見、敵コノ所ヲモ逃出シ四方ニ散乱
シタリモノカシ船ハ水際ノ所ヲ傷メシ
ト見、夥シク水淺レ入リケレハ早々破泊
所ニ引飯レヌサテ又河下ニ残りシ一艘ノ
小舟ハ其場ヨリ直ニ破泊所ニ引歸シタラ
ント思、外敵ノ砲火ヲ事トモセス急ニ河
上ノ方ニ舟ヲ進メツイニ外三艘ノ小舟ト

作
史
食

修
史
館

會シタリカクテ今ハ敵モ散乱シヌレハモ
ハヤ碓泊所ノ方ハ引返サントテ午後三字
五十分頃元ノ路筋ハ返リシニ何レノ臺場
ニモ敵一人モ見ハス難ナク碓泊所ハ立飯
リヌサテ始終ノ事トモ具サニ公使ト提督
ハ物語リシニ提督ハ別シテ諸人ノ振舞且
ハソノ手柄ノ程ヲホメラレタリソレヨリ
兵士八百人大砲八門明日ノ合戦ニ用意ス
ハシト軍令ヲ出サレシガ尚本國ハ問合ソ
ノ差圖ヲ待ツハシトテコノ事ハ見合セラ

レタリ右ニ付華盛頓ハノ書狀ヲパロス船
ハ托シ直ニ支那ハ出帆ノ儀ヲ命セラレ猶
歸便ニハ右炭其外ノ軍用ヲ積ミ歸ルハシ
トノ事ハ見合セラレタリ右ニ付華盛頓ハ
書狀ヲパロス船ハ托シ直ニ支那ハ出帆
ノ儀ヲ命セラレ猶歸便ニハ石炭其外ノ軍
用ヲ積ミ歸ルハシトノ事ナリ
右書狀ノ大略ハ傳信機ニテモ華盛頓ハ申
シツカワシタレハ大統領ノ返書不日ニ参
ルハシト思フナリ

朝鮮ヨリ送リタル書簡左ニ出ス

千八百六十八年中貴國人民「フエビケル」ナル
古モノ我カ國へ来リ一應来意ヲ報シテ退
去セリ然ルニ足下ハ何ユハ右ノ例ニ倣
ハサルヤ是ヨリ前千八百六十五年佛蘭
西ト唱フル國ノ人民我カ國へ渡来シタ
リソノ節ノ始末ハ定メテ足下モコレヲ
聞カレシナラン抑我カ國ノ人民ハ自國
ノ教化ヲ享ケ德澤ヲ被ムルモノ茲ニ四
千年天下獨リ我國アルヲ知ルノミ故ニ

我國ヨリハ曾テ他國ヲ煩ハセシ事ナシ
然ルニ他却テ我ヲ煩ハスコレ如何ナル
道理ゾヤ我國ハ極東ニ位シ貴國ハ極西
ニ位ス足下數千里ノ海洋ヲ越テ来ル不
知如何ナル趣意ナリヤ恐ラクハ先年破
却セシ舟ノ事ヲ問ハンカタメニ非ルヤ
右船乗組ノモノ海賊トナリテ人ヲ殺ヒ
シカ故ニ死ヲ以テコレヲ罰ヒシノミ足
下我カ土地ヲ得ント欲スルヤ能ワス足
下我ト交ランコトヲ欲スルヤ是亦能ハ

サレナリ

因云別差某来于草梁館以米艦事件
言及我象官及館司今揭之于左充参

考

四月二十日別差私宅、相見候ニ付異
船之動静且米利堅一件ニ付北京トノ
間告酬等之儀無之哉、次第尋問ニ及
ヒ同人極内ニテ申聞候趣左之通

一當四月初二日京畿道水原ト江華島トノ
間ノ前洋ニ異船五艘入泊同五日三艘同

七日七艘都合拾五艘同所ニ入泊端舟ヲ
以テ上陸ヲ志シ候ヲ弓銃ニテ打拂候處
竟ニ上陸ヲ不得シテ孰レモ引戻シ翌八
日ニハ其場所退帆セシ由其後別津ハ寄
船セシヤ差備官官名義即八日ニ發京此程
下著ニ付右迄之所ヲ承リ其餘ハ未不詳
何國ノ船ト云事モ不相辨候

一先キノ東萊府使姜氏當官兵曹判書ニテ
冬至使ノ正使トシテ北京ハ赴キ當三月
歸朝ノ砌北京ヨリ被申越候ハ美國ヨリ

依頼ニ及候者朝鮮ト互ニ信ヲ通シ且漂泊等ノ節ハ薪水ヲモ給シ吳候様トノ義申出候趣申来候得共我國ヨリハ斷リニ被及候由

一先年異人控キシ江華徳山ノ陵ハ即當君王御祖父ノ陵ナリト云

大略右之通御座候事

四月二十一日 浦瀬 最助

四月二十四日館司ノ宅ニ於テ

別差口陳如左

一京表ヨリ當月十四日付ノ音信ヲ得候處水原ノ異船ハ彌退去シ去ル十一日南陽、五艘入泊ノ處是亦弓銃ヲ以テ相防キ止ヲ不得レテ十四日退艦ノ由水原ノ船ニハ非ス別船ノ由

○同月十二日嚮キニ吉岡弘毅等内諭ヲ得テ館司ヲレテ彼國ニ告ケシム因テ幹傳官ヲシテ訓導^{安俊}ニ来館アラシコトヲ請ハシム然レ^{李景ト}此病ニ托ノ来ラス此ニ至テ俊卿別差^五連署シテ書ヲ館司ニ致シテ云今番洋人事機

ヲ示サル實ニ隣誼ノ厚ニ出ルナリ即ケ某府
ニ稟シテ政府ニ轉達スト

覺

一今番洋人事機如是通報寔出於交隣厚誼

○同廿八日廣津弘信及安藤太郎外務史生小林

諒焉

辛未五月 日 訓導 倭卿 安僉知印

別差 景五 玄主簿印

館司尊公

○同十八日廣津弘信及安藤太郎外務史生小林

匡 東京府士 某附籍 草深館ヨリ歸ル弘毅及ヒ茂連署

シテ書ヲ本省大少丞ニ致シテ云米韓有事ノ

間ニ必立シテ我目的ヲ達スルハ現場彼ノ猜

疑ヲ増シテ成功甚々期スヘカラス重正ノ辭

表 請免將命職 之書見前 ヲ聽用シ直下親接ヲ以テスル

ニアラサレハ到底意ヲ徹シカタクヲ論シ為

メニ弘信及匡ヲシテ上京具陳ヒシム而シテ

今日米韓ノ形勢我ニ関スル無キ時ハ太郎ノ

韓ニ留ルハ無益ノミ即チ歸朝スル所以ナリ

官

本月念三日安藤太郎廣津弘信著韓米艦發
向ニ付本省ノ御配慮卿殿御内諭ノ趣逐一
領承就テハ外向探討百方手ヲ盡シ候ハト
モ兼テ申上置候通リ内情掩匿ノ土人何分
發輝ト難相定候得共彼照合イタシ候得ハ
米艦入港ノ節彼レ深ク不及問情矢砲ヲ飛
レ拒撃イタシ候儀ハ實事ト被存候然レハ
追々和戰トモ下手可致儀ト存シ候然ルニ
我米艦ノ中間ニ必立シ終ニ目的ヲ達シ候
様トノ御内諭ノ趣モ候ハ共現情ニ於テ益

彼ノ猜疑ヲ増シ彼ヨリ我ニ依頼可致トモ
不被存徒ラニ袖手黙坐米艦ノ廻浦ノニ相
待候事イカニモ無策ノ極ニ存候然ハ舊冬
来ノ手続ヲ以テ百回申論候トモ承諾可致
トモ不被存一同苦評猶篤ト現地情狀申明
致シ廟議可奉窺重テ廣津弘信及小林立匡至
急東上為致候一同見込ニテ再々伺上候嚴
原藩辞表御採用ノ儀ニ御座候何分我直下
ニ應對不致候ハテハ到底信ヲ彼ニ貫徹候
儀ニ無之右御聞届相成候ハ、此機ニ投シ

一恩一威終ニ我目標相立候様勉力仕度何
卒現地ノ情狀深ク御参酌ノ上英明ノ御断
決相成候様御盡力被下度伏シテ祈上候猶
巨細ハ廣津ヨリ陳述仕候間宜ク御聽納被
下度存候尤今日ニモ米艦相廻リ候節ハ御
内諭ニシタカヒ臨機ノ取計ニ可仕存候
間此段御安堵可被下候

一安藤太郎儀此地滞在候トモ今日ノ形勢
ニテハ必用無之且同人見込ニ有之歸朝
イタシ候猶委曲ハ同人及ヒ廣津等ヨリ

御聞取被下度存候

右要用耳如此御座候以上

辛未四月晦日

森山 茂

吉岡 弘毅

外務大少丞

御中

○同二十五日外務卿

宣嘉

ヨリ嚴原藩知事將命職

ヲ辭スルヲ請フヲ聽シ且知事ヲシテ渡韓セ

セシムル等ノ議ヲ稟啓ス

朝鮮國へ出張ノ官員共ヨリ見込書差出候

二付寺島大輔ト熟議致候處現今米利堅事
件ニ有之旁空ク遷延致候ハ最不可然何ト
欽御處置無之テハ不相成折柄右見込ノ趣
適宜ノ良策ト存候就テハ先般嚴原藩ヨリ
願出候家役辭退ノ義此節被聞召候様致度
存候抑對州ニテ朝鮮交通之事務取扱候者
數百年之義ニテ自然交情モ厚ク候ニヨリ
同藩知事自分渡韓シテ事情審ニ陳述致候
ハ、舊格ヲ墨守スル韓人之疑訝モ一朝氷
解シ隨テ御趣意之程モ速ニ徹底可致ト存

候間同藩知事至急東京へ御呼寄セノ上左
ノ通リ御沙汰書御渡シ相成候上御趣意徹
底可致様厚ク御説諭相成度儀ト存候

御書付案

先般朝鮮國事務取扱御免願出ノ趣逐々
廟議ヲ遂テ候處尤ノ儀ニ付被聞食爾
来外務省ニテ取扱可申間此際知事渡韓
致シ外務省ヨリ出張ノ官員トモ厚ク申
談將來兩國交際ノ御趣意徹底致シ候様
外務省官員へ引渡不都合無之様可致候

事

歲遣船其他謬例一切被差止

同藩ノ儀ハ歲遣船公私貿易ノ利潤ヲ以テ
國計ト致シ居候得共右様ノ儀ハ第一名實
不都合ノ上其弊害モ不少候ニ付断然御改
正相成度下然同藩ニ於テ右利潤ヲ以テ舊
來國計ニ取結ヒ來リ候事故一旦御廢止ニ
相成候テハ忽テ人民飢餓ニモ及ヒ可申儀
ト存シ候間對州ハ相當ノ御手當被下候

様仕度存候

辛未五月廿五日

澤 外務卿

因云此書之取捨如何則觀左之往後書
以可知矣

朝鮮事件ニ付過日見込書差上置候通御運
ヒニ相成候ニ付既ニ嚴原藩知事至急出京
被命候趣昨日拜承仕候末猶相考候處右知
事出京迄ハ何レ少ク日數モ相掛リ可申其
間今般歸朝仕候廣津小林等空ク留メ置候
ニ徒ラ事ニ存候間小林ヲ殘レ廣津儀者未

官

二日ノ艦ヨリ一先歸韓致リ七吉岡其外出
張官員ハ之内々御手順之處申合候且其便
ニ嚴原藩ハ之立寄知事面會イタサセ無遲
滯出京相成候様内意相通シ置候ハハ將來
之手順速ニ相運ヒ至極之御都合ニモ可有
之卜心付候儘内々思召相伺候右邊ニテ不
苦候ハハ早々再渡韓之事廣津壺人ハ可申
渡卜存候何奉御評議之上御下命願上候仍
早々如此ニ御咄候也

辛未五月二十八日

外務卿

三條公

御書拜見候朝鮮事件ニ付御示之趣評議致
候處如御示ニテ宜候間小林廣津兩人之内
御都合御殘シ置ニテ可然存候仍早々要用
而已御答如此候也

五月二十八日

外務卿殿

○六月三日嚮ニ本省官員ノ朝鮮ニ行クヤ一日
ノ費一人允永錢三百孔ニ擬シテ之ヲ支給ス

依テ他ノ海外派員ト同額ノ給ヲラシテ事ヲ上
請ス令シテ外國旅費定則ヲ以テス可カラス
現費正算ヲ以テス可シト云

當省官員昨庚午十月中朝鮮國ノ御用トシ
テ出張被仰付候節旅籠料之儀一日壹人永
三百文之割合ヲ以テ御渡相成候處此節出
張先ヨリ御用伺之儀有之中歸京イタシ候
モノ共ヨリ申立候ハ迪ニ御國內同様之旅
籠料ニテハ賄方難相成難澁之趣事實無相
違相聞候間外國出張旅籠料定則之通朝鮮

出張之モノハモ彼地滞在中御渡相成候様
致シ度候間其段早々大藏省ノ御達相成候
様致度此段相伺申候也

辛未六月三日 外務省

辨事^官御中

辞令書

伺之趣無餘儀相聞候ニ付差向貳千六百弗
相渡候間於大藏省受取可申尤外國旅費定
則之通難相成候間彼地相當ニ取賄追テ精
算可致候事

○同月鹿兒島藩民ノ朝鮮地方ニ漂到スル者彼引テ草梁館船艙口ニ到リ接受ヲ請フ我其非禮ノ措置ヲ論詰ス更ニ彼力任所訓導別差之官宅即衙門也ニ於テ之レヲ領受ス

因云除對州人民之外漂到于朝鮮者屬館南則太多浦屬館北則牛巖浦乃館司等親到其地問其情而接受者是例也

○七月二十八日廢藩置縣ノ制建ツ故ニ外務卿岩倉具視京都府華族同大輔寺島宗則連署シ宗重正ヲシテ外務大丞ニ任シ以テ朝鮮尋文ノ事

ニ盡カセシムル事ヲ請フ即コレヲ聽ス又重

正ヲシテ此意ヲ朝鮮國ニ報シ併テ外務官員

ニ面接アレン事ヲ請ハシムルノ請ヲ決ス

五月廿七日嚴原縣前知事宗重正至急御召

ニ付朝鮮御用ノ義ト心得上下奮發差急上

京仕候趣ノ處藩縣御改制被仰出重正儀知

事職御免相成閩縣奉畏候ハ勿論ニ候得共

僻遠ノ孤島何トナク人氣委靡ノ夾朝鮮御

用ノ義尋常公役同然ノ心得ニテ取扱候テ

ハ難行届義モ可有之候間重正儀外務官員

二被命渡韓イタシ候様相成候ハ、一同ノ
氣力振起仕充分ノ尽力勉勵ニ可至此段宜
御沙汰相成候様仕度存候以上

未七月二十八日 外務卿

外務大輔

因云七月十四日廢藩置縣同二十八日

上請同二十九日重正拜外務大丞

○同二十八日訓導安俊卿草梁館ニ来リ嚮ニ月二

重正ヨリ東萊釜山兩使ニ所贈ノ書翰請面接
外務官

員之ヲ領シテ去ル
書也

○八月五日外務大丞重正渡韓ノ命ヲ拜シ及大

島正朝前見外務省出仕奏ニ補シ重正ト同ノ渡

韓スルヲ命ス

○九月東萊府使鄭顯徳釜山僉使金徹均書ヲ重

正ニ復シテ外務官員ニ面スルハ規外ニシテ

聽從スルノ理ナシト云又訓導俊別差
如山連

署シテ書ヲ館司ニ贈ル其意亦然カリ

朝鮮國東萊府使鄭顯徳奉復日本國左近衛

少將對馬守平公閣下良迅狄至恪審啓居莊

護深庸喜誦頃聞貴邦庶務維新更設外務省掌

交隣之事。此係更張。認存商量。而至於該省使員之因此來館。實是無前之事。况有面接之理乎。蓋自交隣後。幾百年以來。典章昭如星日。誠信重於金石。苟或造次。初例不思。遵守則事無定規。弊將隨至。是豈為貴國善圖耶。誠欲世修隣好。愈往愈篤。未若永遵旧規。不愆不忘。餘付象官。萬惟照亮。肅此不備。

辛未年九月 日

朝鮮國釜山僉使金徹均奉復日本國左近衛少將對馬守平公閣下。華緘遠至。憑審起居。冲

裕慰浣良深。貴邦外務省使員之來懇面接。實是恒規之外。豈有聽從之理。莫若遵守舊規。永敦隣好。餘付象官。惟冀照亮。肅此不備。

辛未九月 日

覺

一別書契公幹事。已為盡於本府釜山回答書契中。想宜照諒。蓋自交隣以來。兩邦事務各有其職。書契往復。亦有常格。仍舊遵守。無有違越。即金石之約條也。第以大修使書契言

之因字義之違格初不開捧况外務省公幹
之說屢請面接至有別成書契者是果約條
所在耶三百年所無之例貴邦非不洞察弊
邦之不冝勉從貴邦亦當量燭而故欲做出
事端者無乃凌侮隣國之意乎兩使道大加
痛歎此事一欺雖千言萬言決無回聽之理
故敢將教意略此替伸不備

辛未九月 日

訓導俊卿安僉知

別差山如李主簿

館司尊公

○十二月本省卿輔ヨリ在韓吉田弘毅ニ宗重正
舊好ノ縁アルヲ今般更ニ禮曹及ヒ東萊釜山
兩使ニ書ヲ贈リ尋交許否ノ底意ヲ問フニ依
テ進退其機ヲ失ハサルヲ令レ並ニ在京森山
茂廣津弘信ニ參判盡カスヘキ旨ヲ命ス

外務少記吉岡弘毅

朝鮮國尋交之儀ニ付テハ去冬來渡韓盡力
之央彼俗頑固不移處ヨリ使命不相達遷延
今日ニ至ル依テ幸イ外務大丞宗重正舊好
之縁アルヲ以テ今般更ニ禮曹并東萊釜山

參事官

兩使、書韓ヲ介贈シ本邦之誠ヲ示シ尋文
許否之底意ヲ問候條進退處分不失宜様注
意專要之事ニ候取扱心得等ノ如キハ別冊
之通ニ候間此段及内諭候事

辛未十二月

外務卿副島種臣

外務大輔寺島宗則

外務權大録森山茂

外務權大録廣津弘信

朝鮮尋交ノ儀ニ付テハ少記吉岡弘毅、及

内諭置候儀ニ有之候條使事篤ク参判盡力

可有之事

辛未十二月

外務卿副島種臣

外務大輔寺島宗則

因云令弘毅書中別冊者散逸未見而實
之原任及弘信亦不判然矣且朝鮮事務
書逸者往々有之則九年九月自外務權
大書記官渡邊洪基併問之于茂之在浪
華而無所得將以他日補之今茂答洪基
如左

倍御精務奉珍壽候扱テ朝鮮事件ニ關シ候

書類ハ編集ニ付欠編之書面手許ニ候ハ、
可差出云々拝承仕候然處小生ニハ從來手
扣ト申ハ寸紙モ止メ不置適々書類携還取
調候ノミニシテ公私トモ要類ノ書ハ更ニ
無之候併シ同僚廣津弘信ハ綿密ニ手扣等
止メ置候人ニ候間同人ハ御掛合被下候ハ
、或ハ相調ヒ可申敷ト存候一休小生ニモ
己巳年来努力ヲ盡シ候儀故可成ハ一通リ
ノ書類ハ略編集イタシ私家ニ止メ置後事
ニ供度ト存候念慮勅候得共該事件ニ關

シ候書類ハ世上ニ榮表スルヲ憚リ候事ニ
テ殊ニ非官ニ至リテ右拜借願出候許否如
何難計ト躊躇イタシ候儀ニ有之候切角之
御掛合ニ候得共右之仕合ニ付宜御聽納可
被下候別紙併テ御返上可申上候草々拜復

十月六日

森山茂

渡邊洪基様

尚々吉岡氏ハ達シノ添書ト申ハ曾テ在
職之頃ハ時々見受候事有之候即其委任
(見込書之類)右ハ辛未年冬伺取候儀ニテ

岩倉大便秘奏歐之前後ニテ即副島氏寺島
大輔トノ檢印有之右ハ慥ニ級込ニ有之
候事ナリ其後星霜経タル間入用無之書
故別ニ他ニ持出シタル事ハ有之間敷ト
存候
右様委シク覺居候右ハ壬申七月歸京之
節小生等吉岡ト引揚方ニ付副島氏ヨリ
訊問セラレ候アリテ相答フルニ同氏之
意委任ノ趣ニ反シ候故即檢印ノ書ヲ持
出シ論辨セシ事アリ

一休本件書類ハ散逸甚シク獨リ是ノミ
ナラスト想像イタレ候御骨折御察申上
候

○同二十八日重正及正朝渡邊ノ命ヲ罷メ而シ
テ正朝ハ併テ出仕ヲ免ス廷議一變特ニ使ヲ
派シテ廢藩置縣ノ報知ヲ為所以ナリ乃チ相
良正樹嚴原縣士本省十等出仕ニ補シ其使ニ充ツ

同五年壬申

○正月森山茂時為推大録宍歳十及廣津弘信時為
一月自草深館歸
録大正樹在嚴原等ト共ニ重正ヨリ禮曹参判及

東萊釜山兩使ニ贈ル所ノ書翰ヲ携テ渡韓シ
以テ復々我改制ノ旨意ヲ告ケ併セテ尋盟ヲ
講究スルヲ謀ル是ニ於テ大修使萬機親裁報
知之使伴植
口鐵ヲシテ歸國セシム正樹ハ彼ニ對シテ大
差使ト稱ス是レ舊例ニ倣ヒ宗氏ノ家人タル
ヲ表スル故ナリ然レ臣訓導安俊卿共面接ヲ
肯セス空シク照會スルモノ二十餘度而シテ
訓導ハ上京スト云

大日本國從四位外務大丞平義達書ヲ朝鮮
國禮曹參判某公閣下ニ呈ス我邦戊辰之歲

國制一新セシヨリ以來天子親政シ幕府
ヲ廢シ太政官ヲ置キ封建ヲ革タメ郡縣ト
為ス是ニ於テ世職ノ官皆其職ヲ罷ム義達
カ如キモ亦對馬守ノ任及ヒ左近衛少將ノ
官ヲ解キ并ニ我邦ト貴國ト交際將命ノ世
職ヲ止メ更ニ義達ヲ以テ外務大丞ニ任シ
外務卿ヲシテ傳ヘシ允旨ヲ蒙ルニ曰ク嚮
ニ朝廷朝鮮國ト舊盟ヲ尋シテ欲シテ而
シテ汝ニ命シテ其事ヲ幹セシム但シ外國
交際之事ニ至テハ則既ニ外務省ヲ置キ之

ヲ管ス故ニ昨年十月特ニ外務官員某等ヲ
遣ハシ往テ東萊釜山兩使ニ昭シ以テ本邦
誠意ノ在ル所ヲ陳述セシム而シテ彼國ニ
於テ尚未タ之ヲ領悉ヒス今汝カ世職ヲ解
クトイハレ其舊交素アルヲ以テ汝ヲ現官
ニ任シ更ニ汝ヲシテ兩國舊交ヲ尋クノ事
ヲ告シム汝須ラク克ク朝廷ノ盛旨ヲ體認
シ速ニ使ヒテ差シ以テ其狀由ヲ告ケ並ニ
彼此唇齒ノ間宜ク舊交ヲ修メ新盟ヲ講ス
ヘキノ理ヲ説キ以テ國家善隣ノ誠意ヲ達

シ以テ永遠不渝ノ良圖ヲ成スヘシ義達敬
テ其命ヲ奉シ既ニ其事ニ從フ乃チ家人相
良正樹ヲシテ以テ此事ヲ報セシム閣下其
レコレヲ明諒セヨ義達故アリテ名ヲ重正
ト改ム合ニ併テ拜告ス肅此不宣

明治四年辛未八月

同譯漢文

大日本國從四位外務大丞平義達呈書朝鮮
國禮曹參判某公閣下我邦自戊辰之歲國制
一新以來天子親政廢幕府置太政官革封建

為郡縣於是世襲之官罷其職如義達亦解對
馬守任及左近衛少將官並止我邦與貴國交
際將命之職更以義達任外務大丞矣今又蒙
令外務卿傳旨曰嚮朝廷欲與朝鮮國尋舊盟
而命汝幹其事但至外國交際之事則既置外
務省管之故昨年十月特遣外務官員某等往
晤東萊釜山兩使以令陳述本邦誠意之所在
而於彼國尚未領悉之今雖解汝世職以其舊
交有素任汝現官更令汝告尋兩國舊交事汝
須克體認朝廷之盛旨速差使以語其狀由并

說彼此唇齒之間宜修舊文講新盟之理以達
國家善隣之誠意以成永遠不渝之良圖義達
敬奉其命既從其事仍使家人相良正樹以報
此事閣下其明諒焉義達有故改名重正合併
拜告肅此不宣

明治四年辛未八月

大日本國從四位外務大丞平重正書朝鮮
國東萊釜山零公閣下呈我邦政體一新
之狀及ヒ重正自ラ兩國交際將命之職ヲ司
サトル能ハサル等情乃チ曾ラ家人某ヲ

シテ之報知セシム諒ルニ兩公閣下已ニ無
鑒ヲ賜ハン蓋シ本邦ト貴國ト隣誼之深業
ニ既ニ三百有餘歲重正歷經之カ幹旋ヲ為
ス今朝廷重正ノ職ヲ免シ猶數百年舊文
之情好ヲ念ヒ特ニ重正ヲ外務大丞ニ任シ
命シテ兩國尋交之事掌トラシム本省更ニ
原差官員吉岡弘毅等ヲシテ兩公閣下ニ拜
晤シ備サニ其委曲ヲ語ケ又尋交盛意之在
ル所ヲ陳述セシム其惟レ丙公閣下兩國良
圖ヲ以テ重ト為シ善キニ從ツテ吉岡弘毅

等ヲ款接シ其陳述スル所ヲ聽納シ萬ツ本
省懇篤之情誼ニ反拂スルコナキヲ幸トス
誠信在ル所口言ト衷ヨリ出ツ伏テ冀クハ
兩公閣下其レ之ヲ諒セヨ肅此不宣

明治四年辛未十月

同譯漢文

大日本國從四位外務大丞平重正呈書朝鮮
國東萊釜山兩令公閣下我邦政體一新之狀
及重正不能自司兩國交際將命之職等情乃
曾使家人某報知之諒兩公閣下已賜垂鑒焉

蓋本邦與貴國隣誼之深業既三百有餘歲重
正歷經為之斡旋今也朝廷免重正之職猶念
數百年舊交之情好特任重正外務大丞命告
兩國尋交事本省更令原差官員吉岡弘毅等
拜晤兩公閣下備語其委曲又陳述尋交盛意
之所在其惟兩公閣下以兩國良圖為重從善
款接吉岡弘毅等聽納其所陳述萬勿反拂本
省懇篤之情誼為幸誠信所在言繇衷出伏冀
兩公閣下其諒之矣肅此不宣

明治四年辛未十月

○曩キニ廢藩ノ制建ツ因テ重正ヨリ朝鮮ニ所
送ノ歲遣船ハ今年ヨリ廢絶ス

○三月二十日別差某訓導稱待勘而不
來故別差代之草梁館ニ

來ル正樹面接乃チ參判及兩使ニ贈ル所ノ書

翰贖本先示書翰贖本者彼
我從前之慣例也及ヒ來意ヲ告ル口

陳書卜解疑書日本國上冠大
字等之辨解也トテ遞與ス

書翰見前

口 陳

今般專使而告報者ニ我國自戊辰年制度維
新ニシテ廢幕府ニ付置太政官ニシテ草封

建玄什為郡縣玄什。於是互世襲之官。皆
罷其職。玄什。如吾對馬州守。亦解其任。
及左近衛少將官。並罷我邦與貴國。交際將命
之職。玄什。更任外務大丞。玄什。且蒙令外務
卿傳旨。玄什。其旨。曰。向。以。朝廷。欲。與。朝鮮
國。尋。舊。盟。交。際。之。事。則。既。置。外。務。省。玄。什。管。之。
故。互。昨。年。十。月。年。特。遣。外。務。官。員。吉。岡。弘。毅。森
山。茂。廣。津。弘。信。等。玄。什。往。晤。東。萊。釜。山。兩。使。以
陳。述。本。邦。誠。意。之。所。在。玄。什。而。於。彼。國。尚。未。領。悉
之。玄。今。雖。汝。外。世。職。之。玄。什。以。其。舊。交。有。素。一。玄。什。

任汝現官玄什。更令汝告尋兩國舊交事玄什。
汝須克體朝廷盛旨玄什。速差使以語其狀
由玄什。並說彼此唇齒之間。宜修舊交講新盟
之理玄什。以達國家善隣之誠意玄什。以成永
遠不渝之良圖玄什。敬奉其命玄什。以
既從其事玄什。乃修書契玄什。使鄙生。互。以
報告此由玄什。請僉位乞體此委曲玄什。轉
告萊釜兩使前玄什。善稟貴朝廷玄什。速有應
報事。互。是希。

一為外務官員接東萊釜山兩使議尋交之事。

修史
食

大丞乃奉旨另致書於東益兩使一以請
速面議請定而以效兩國款則何等盛美如
之以冀僉位克告事狀於兩使前立周旋順
成之已為深企望

壬申三月二十日 差使相良正樹印

解疑書

今般告國事議尋盟書契中書大日本者是本
邦古來之稱号也一以又曰大和我邦訓並謂
之耶麻土國史之所記分明照著也一以大和
州者之人皇犬祖神武天皇所都故遂為國号

則非今始新用之者也一以上年與清國結
好約業定而其往復書中彼此称大日本國云
々大清國云々 天皇皇帝天子皇上陛下勅
睿欽差等之文字亦彼此與称之修書其他萬
國往復書中亦總称大日本國 天皇修書云
々立也

一今州守轉任外務大丞 天皇為賜銀印故
職用之如其遣船者之為貴國照驗修路文
暫用以貴國鑄造圖書期尋盟之日謀宜立
制冀其諒之立也

修史
官

修史館

一書契以國字者亦本邦舊式也清國往復其
他海外各國往復皆然

一右項雖如在舊約然而今解馬州守職在任
在現任不可行前式以之乃萬國應酬之常
規無獨不可行之於貴國之理幸深亮焉

○四月假訓導高剛汝書ヲ館司ニ致シテ云公幹
ノ事兩使ニ細稟シテ京師ニ秘達ス道路往還
三十餘日ヲ消ス其回教ヲ待テ答ヲナス

覺

一向日公幹之事緣兩使道前細々稟達則答

教内有難擅便秘達京師往還似於三十餘
日待其回下更答之意為教茲以仰陳須諒
焉

壬辛四月 日 假訓導 剛汝 高主簿印

館司尊公

○五月七日近コ口草梁館駐紮吉岡弘毅等ヨリ
此後彼國ノ決答ニ依リ該館ヲ保護スルノ法
ヲ立テ一旦歸朝スルノ議ヲ稟啓シ因テ正院
ニ上申ス

朝鮮國へ出使官員森山権大録廣津權大録

修史館

修史館

再渡以來彼ト應接 次第時々報知有之候
得共免角彼レノ習僻トレテ先例古格ヲ固
執レ順奉ノ運ニ不至屢次談判往復 上昨
今漸ク御改制報知 書契案受取都表へ内
聞ニ入候一段ニ相運此上ハ都表 決議次
弟不遠回答可有之ト存候得共萬一清國へ
内啓差圖相受候上決答可及杯申出候哉モ
難計旨出使ノ見込モ有之其節ハ回答 期
ヲ約レ館内取締向相附一ト先引揚候積リ
ニ而右館内取締向見込別紙ノ通申越候右

者相當之義ト被存候付ソノ分取計可申上
旨相違置候得トモ御承知マテ来翰之内抜
萃別紙相添此段申上置候也

外務省

正院

御中

朝鮮出張ヨリ

来翰抜萃

去月廿日別差官名但レ平常日本人ニ接ス
ルハ唯訓道ト別差トノ訓
道ハ長官別差ハ次官ナリ入館両書契トモ捧出請取云

官

修史館

イタシ候^段過日申進候其後過ル廿九日右
回答之為ノ別入館差使相良正樹面接候處
過日捧書イタシ候書契案并ニ口陳書取共
兩使道^{東萊府使}益山僉使^使へ轉達イタシ候然ルニ重
大ノ事件萊益一己ノ所分ニハ難相成ニ付
廷議ヲ經其上左右可及回酬就テハ都表往
復ノ間凡三十餘日ニテ相辨シ可申旨依頼
イタシ候ニ付其段聞届候右ノ運ニ立至リ
候上ハ彼若承諾イタシ候ハ、兼テ覺悟ノ
通り懇々談判ヲ重子尚進退相伺候得トモ

萬一彼自國一分ニテ決答イタシカタク先
清國へモ内談^格ヲ經其許可ヲ得候上可及確
答旨申出候哉モ難計左様ノ節ハ逆モ三五
月間ニハ埒明申間敷併右様懇談イタシ来
候ハ、早晚成就ノ方ト被存候間其時ニ臨
ニ程克談^判言ヲ纏ノ回答ノ期ヲ約シ一應引
揚可申積リニ御座候然ルニ引揚ケ候上ハ
従前在役ノ銘々一同歸國申渡シ候ハ勿論
ニ候得共舊来居込ノ商人モ有之其上館内
擴濶且多數ノ屋宇モ有之其外漂民迎送方

修史館

假ニ小例ヲ設ケ候節ハ是非官負一名其他
 通辨小モノニ至ル迄凡十餘名在館為致置
 候ハ子ハ内外取締相立不申則別紙見込大
 略前以御許論ニ入置候尤從前渡ニ来ノ格
 ラ以右留置候人員給料并ニ大小船雇入賃
 總入費一ヶ月大約五百金ト相立候ハ悉
 皆補給方行届可申哉ト相考候右ハ尋盟成
 熟迄ノ取繫方ニテ成熟ノ上ハ大藏省官負
 等モ出張ノ上實地適宜ノ見込相立可申存
 レ候云々

作
 虫
 食

壬申四月三日

廣津 弘信

森山 茂

吉岡 弘毅

朝鮮事務課

御中

和館取締見込

官廳

館司 壹負

但ニ廣瀨浦瀨兩人ノ内一名
 残ニ置候節ハ兼務可然カ

庶務 壹負

旧来交隣方ノ内熟知ノモノ

通詞 四負

會計書辦兼務

修
 史
 官

修史館

辛 三人 館中見廻り并ニ兩門守衛

小者 五人 内船大工壹人 大工壹人 小使三人

用船 三隻 大船壹隻 十六人乘リ 小船二隻 七人乘リ

但ニ押切舟 右ハ臨機ニ應シ或ハ三隻或ハ二隻見計ノ事

右

○同二十二日談判ノ機ニ依リ弘毅等ヲシテ草
梁館ヲ去ラシメ及同館ノ處分漂民接待ノ順序
ヲ上申ス同二十八日ニ至テ之ヲ許可シ且同
館ヲ以テ外務省ノ所轄トナシ長崎伊万里兩
縣并宗重正ニ令アリ

朝鮮國草梁倭館詰并漂民取扱方之為長崎
表一為相詰候伊万里貫族之者引揚方之義
ニ付伊万里縣ヨリ掛合越許議中外務大丞
宗重正ヨリモ別紙之通申立右ハ戊辰以來
維新報知之書契ヲ不受邦内更革之世態更
ニ不貫徹然ルニ旧來接待之役員卒然引揚
候テハ當省出仕之官員談判之道相絶候ハ
必然ニ付不躰裁ナカラ今日迄旧貫ニ依リ
在館之役負等其儘据置候儀ニテ此程出使
之官員ヨリ報知之趣ニテハ書契案ヲ請取

修史館

都表往復三十餘日之猶豫ヲ以回答申出候
答ニ付外務省出使官員之進退及ニ館内之
所置等回酬之模様ニ寄可取計旨ニ有之右
者去ル七日大略申上置候通りニ有之夫是
取束子勘弁致候處此上彼國ヨリ何様申出
候トモ從前之姿ニ可差置筋ニ無之宗重正
轉任之事實彼國ニモ前書契案ヲ以テ承知
候上ハ在館之役員ハ則宗氏家人ニ當リ候
ニ付一同可為引拂ハ勿論之處旧來在留之
商民モ不少館内四五万坪モ有之屋宇多數

修史館

其上漂民迎送方假ニ小例ヲ設ケ候節ハ官
負一二名通弁庶務會計館中見廻リ西門守
衛小仕等迄如何様減少候テモ凡貳拾人位
ハ在館不為致候ハテハ交際并取締難相立
趣ニ付右ハ在館旧役負之内人撰之上更ニ
當省官員ニ申付其餘ハ一同為引拂候積リ
ヲ以所置方之儀出使官員見込ニ相任セ候
様致度候抑草梁倭館之儀右様廣大ニ過當
今不用ノ姿ニ相當候ヘトモ是ハ後來御國
威ヲ振揚之必要物ニ付可成旧貫依然一步

修史館

一 漂民取扱方之儀ハ是迄内地漂著之分ハ長
 崎縣一送り同縣ニラ一ト通り相糾結合之
 伊万里縣官員へ引渡シ便船次第對州嚴原
 一送り同所ヨリ使者ヲ添朝鮮國一送届仕
 候仕來ニ有之方今之御政躰伊万里縣官員
 長崎表へ相詰漂民取扱候ハ不都合而已ナ
 ラス御入費ニモ差響候間自今長崎縣ニテ
 引受所置致シ通弁等必用ノモノハ同所官
 員ニ申付嚴原迄送り届候失費等ハ同縣廳

費ニ相立嚴原ヨリ朝鮮國へ送還ノ義ハ同
 所出張伊万里縣官員ニテ取扱失費モ同縣
 廳費ニ相立可申旨改テ兩縣へ御達相成候
 様致シ度然ル上ハ従前在館ノ役負及ヒ漂
 民取扱ノ為長崎表へ為相詰候役員ハ為引
 拂草梁倭館ハ外務省出使官員へ引渡長崎
 表於テ漂民取扱ノ為ニ設置候建物等有之
 候ハ、同縣へ引渡候様伊万里縣へ御沙汰
 相成宗大丞へモ其段御沙汰有之度候
 一 彼國館内失費ノ儀接對入費ヲ始メ給料并

大小船雇入賃筆墨紙蠟燭等館内諸失費一
ヶ月金五百圓ト相立候ハ、悉皆補給方可
行届哉ノ趣出使官負見込ニ候ヘ尺右ハ大
約ノ義此上當省官負在留申付御國体ニ不
拘義ハ非常ノ省略致シ追テ御入用ノ目途
可相伺元来公私貿利ヲ以テ賄来候ヘトモ
去未年限歳遣船相廢シ今日ニ至テハ重正
自費ヲ以テ相償候時宜ニ至リ難波ノ段相
違モ無之今般當省ニテ管轄候上ハ速ニ其
處置無之テハ端的差支可申義ニ付差向館

備前館

内諸入費トシテ金五千兩御下ケ相成候様
致シ度右ヲ以テ精々省略為取賄追テ清算
御勘定仕上ケ大藏省ハ可差出右ハ航海ニ
時日ヲ費シ殊ニ秋冬ニ向候テハ渡海ノ日
和稀ニテ急場ノ音信相成カタキ場所ニ付
前書金高文ケハ是非トモ御下ケ相成候様
致度依之當省並伊万里長崎兩縣宗大丞ハ
御沙汰振相添此段相伺候也

壬申五月二十二日

外務省

正院御中

外務省

附箋辭令書

伺之通但金子之儀ハ大藏省ヨリ可受
取事

別紙

先般廢藩置縣ノ御變革 重正韓國將命ノ
家役被免更ニ本官ハ轉任ノ始末自家使
命ヲ以報知ニ及猶朝廷御誠意ノ存スル
所兩間交際ノ体裁ニ至テハ本省出仕專
任超海有之候ニ付從前自家ヨリ差遣置
候役員ハ不取敢引拂歲船往來ヲ廢シ勘

合ノ印等ハ速ニ送還ニ及ヒ更ニ本省ニ

於テ御主意宜御談判可有之義至當ノ筋

ニ候處頑固ノ國風公幹ノ委曲徹底不致

前從來ノ條約ヲ變シ是迄居込役負等卒

然引拂候テハ御用害顕然ニ付内外名實

相違不体裁ノ儀ナカラ暫ク曰貫ニ依リ

在館役員ノ進退等總テ本省出役ノ官負

ハ相托シ置候處此程韓地ヨリ報知ノ趣

ニテハ先日任譯ノ者入館書契案令捧出

候ト相聞然ル時ハ御邦内御更革ノ世態

重正轉官之事實彼國ニモ公然承知致シ
候上ハ從前ノ行掛ソヲ以テ難相運ハ無
論ニシテ彼、對シテハ重正家臣内費ハ
伊万里縣貫屬現今取扱候事務ハ即本省
ニ管ス則休裁不相立ノミナラス昨年迄
ハ公私貿易利潤ヲ以て役員月給往來船飛
船等ノ入費ヲ初メ館内一切ノ用費從前
ノ振ヲ以テ差償居然處歲船貿易ノ儀ハ
昨年限相止メ當春以來總ノ餘金ヲ以テ
渴々差償ニ置御談判ノ御用邊相整候上

内外名實ノ齟齬等無之様一齊本省ハ引
渡役負ノ義ニ速ニ引揚候様取計度先以
テ當時暫クノ場合ト相心得在館役負共
ニ於テモ必至精配致シ總テノ用費無不
都合償來候處今日ニ至リ候テハ更ニ可
相補目途ニ無之春來今日迄館内入費ヲ
初メ朝鮮ニ屬候用途全重正自費ヲ以テ
相補兼々困難ノ内情切迫今後如何トモ
難相届候ニ付館内用費ハ力ニ不及飛船
往來船漂民冗費等夫々速ニ御處分被成

下從前長崎嚴原ニ於テ自家家從ノ名称
ニテ漂人ニ相携候役員韓地同様速ニ差
免長崎ノ儀モ為引拂度通并其他是迄取
扱来リシ者ノ内尔後トモニ被召仕者ハ
本省長崎縣何レノ属下ニモ被命被下度
候

一昨辛未年限歲遣船貿易廢止致候處年来
通貿ノ物品兩間未収ノ差引相濟數十ヶ
年ニ引纏入纏レ居候處此節ニ至リ其儘
可闊様無之双方差引合等明瞭相立度精

々及差圖置候ハトモ多年ノ義ニテ未夕
取調濟ニ不至候ニ付為取調承掛ノ者少
々差遣双方從來ノ出入為致清算度候事
右ノ件々差向候義ニテ終モ猶豫難相成
何分至急御指揮被下度所希御座候以上

五月 宗 大丞

五月二十八日自史官公文如左

朝鮮國草梁倭館詰並漂民取扱方之儀御沙
汰書並伺書御指揮濟ニ付相違候且伊万里
長崎兩縣ノ御達寫並為心得宗外務大丞ノ

同斷寫トモ相廻候也

壬申五月廿八日

史官

外務省

御中

外務省

朝鮮國草梁倭館在住同國交際事務並漂
民取扱之義自今其省可為管轄候就テハ
從前同館并長崎表、為相詰候伊万里縣
貫屬ノ輩今般為引拂内地ヨリ漂民送還
ノ義ハ同縣並長崎縣、別紙ノ通リ相違

候條倭館ハ宗重正ヨリ受取取締向等處
置可致候事

壬申五月

太政官

長崎縣

朝鮮國漂民長崎表ニ於テ取扱方從前伊
万里縣貫屬ニテ致處置候處今般右貫屬
ノ輩為引拂候條自今漂民之義其縣ニテ
取扱對州ニテ送届候様可取計候事

壬申五月

太政官

伊万里縣

朝鮮國交際ハ外務省ニテ管之同國漂民
長崎於テノ取扱方ハ同縣ニテ致處置候
條右兩所ハ從前為相詰居候其縣貫屬ノ
輩ハ為引拂可申候尤嚴原ヨリ朝鮮國漂
民送届ノ義ハ從前之通相心得倭館出張
外務省官員ハ可引渡事

太 政 官

外務大丞宗重正

朝鮮國漂民取扱方ノ義今般伊万里長崎
兩縣ハ別紙ノ通相違候條同國倭館ノ儀

ハ外務省出張官員ハ可引渡候事

壬申五月 太 政 官

○同二十五日訓導安俊卿京城ヨリ歸ノ草梁館
ニ就キ相良正樹ニ面レテ云今般ノ公幹ハ國
中ノ議ヲ収メテ後々其受否ヲ決答スハ是
レ朝命ナリ其期限ノ如キハ早晚歲月ヲ定ム
可カラスト是ニ於テカ正樹等以為ラク東萊
ニ前往シ府使ニ親接シテ其成否ヲ決セント
乃チ二十六日夜半同館ヲ發シ俊卿コレヲ諾
シテ前導ス

○六月嚮キニ相良正樹及ニ館司深見正景原縣士
等東菜ニ入ルヤ書ヲ以テ詳ラカニ来意ヲ陳
ルト雖トモ府使之レヲ拒シテ面セス親率官
ヲシテ言ハシメテ云ク條約外ノ事ハ舉行ス
可カラス又訟革事務ハ遽カニ左右ヲ議スヘ
ケンヤ早晚ヲ論セス惟恭シク處分ヲ俟ツ可
シ云々且關門ヲ擱出スルヲ以テ論スト其口
傳スル所ヲ以テ差備官ヲシテ書贈シテ之レ
ヲ證セシム因テ到底其無効ヲ察シ空シク歸
館ス六日也

是ニ於テ吉岡弘教等協議ヲ竭シ曾テ進退省
裁ヲ經ルノ旨ニ基キ舉館退去ニ決ス又差使
館司ヲシテ論難書ヲ東釜兩使ニ贈リ差使ハ
歸テ命ヲ大丞ニ仰キ館司ハ姑ク留テ人民ヲ
總理シ進退亦大丞ノ命ヲ待ツ等ノ意ヲ告ケ
シム
夫雖有兩問曰来之條科ハ然鄙職等直来
貴所懇扣事情者者非他專使超溟以來俾任
譯傳致且呈左錄之書陳而其回教遷延累月
漸至今月二十五日訓導就館所傳遲速間不

館

知其可望然則奉命鄙職等不可免目前罪科而於外務大丞我朝廷譴責合不翅矣是所以不能俟以訓導所傳安居館中也故謹拜閣下恭告其急並控其切迫惶悚之情一仰請深體茲情實幸蒙特處何幸加之其仰特處者唯只欲盡我誠信之情誼耳前者所告書更錄如左

以下文與三月二十日差使示于別差口陳書略同故今中間略之亦仍原本耳

外務官員之在於館中也一是賚大丞致參判及東萊府使之書契用欲修旧好講尋盟然則鄙職等傳大丞奉書以議幹事亦無所差別也一不敢請洞照此意速為面接其如任譯亦與鄙職等無為差別許面接事是所深望也

右項亦欲盡我誠信之情誼耳

壬申六月 日 差使相良正樹

館司平 正景

交隣以來約條堅如金石彼此相守已為三

百餘年矣。貴國所幹如係約條所在，則我國處分必無不施之理。若或違畫約條，雖千訴萬言，斷不聽許。已悉雷憤，而今以公幹事言之，此是彼此間訟革事務，則何可以一朝一夕遷議左右乎。前已備陳於朝廷，亦當收議於國中，然後始可進退。故今番訓導之自京師下來後，業以此意回報於館中，則毋論早晚，惟當恭候處分，而以攔出館門，犯越禁界者，作能事。至於上府騷擾之境者，安有貴國守約條知法禁之意乎。假令自貴國有施措

於國中之事，而其所施措，有或不便於公議者，則其勢不得不還寢。而況不可容易議列之事，肆然欲行於隣國，隣國寧有肯受之理乎。以面接事言之，宴享時相接外，無更相接。自是約條亦所共知，則此知萬不近理之說，設或許其面接，其間訓導公幹之說，皆是使道分付，則此外有何樣辭說，強請面接乎。更勿煩說，即速撤還安頓，惟候早晚間處分，而處分回下之前，凡係交隣事務，遵守旧約，無一違畫，然後乃可有公議決末之日。以此諒

之無傷隣好可也

右親率軍官傳分付以此照諒焉

壬申六月初六日 差備官敬汝韓主簿印

差使 館司 尊下

傳喝書 即論難書也

一春來貴國應接我輩之情狀具陳於外務省
官負前官員曰曩日我外務省奉朝旨令余
輩納尋文盛意於彼國不款接余輩顧彼國
有未了悉我意之所在者故反復鄭重傳致
我意有年于茲彼國輕侮終始以曖昧模糊

之語對我，不毫應來意，今亦以所聞察之，則
托辭於左右，以拒我尋文之誠意也。夫交隣
條理，曲直名分，世界自有公議正論，今不更
贅余輩當回報彼國之情態於本省，仰處分
耳。館司其以此告彼國。

一日前某直入貴府者，專使起溟以來，頻俾任
譯傳致公幹緊重之情由，五閱月不得捧出
書契奉使之任，館司之職，不堪悶迫惶悚之
情。至五月念五日，訓導始就館曰：書契捧出
之事，將收議於國中，而後致決答。因問其期。

則曰不可期幾年月嗚呼是何言歟夫收議
於國中當以府使內啓達京師之日直行之
托決議之旨於訓導以荅我然曠日踰月至
今日曰將收議於國中決議之遲速不可期
幾年月也且貴國之大小人民之少大抵可
知貴朝神速下令收議於國中數月可決安
有遲速不可知之理乎因恐春來任譯之稟
告我情實於使道前或有未^其盡委曲者若夫
不然則兩國間隣誼友情之所在豈有如此
滯滯使命於境上之理乎因欲入貴府親接

使道陳述來意之委曲以約決議確答之大
限乃告其意於訓導且求其同伴開路訓導
曰貴使入府之事非僕所是非然使節之入
府非無前例若夫同伴護行即任譯職分中
之事不敢辭其命於是乎入府之議決而其
途中每遭村民之扣留公然陳述入府之情
由遂得開路穩入貴府者貴國官吏之所共
承諾也豈圖軍官所傳差備官所錄書中曰
欄出館門犯越禁界云々嗟呼是何誣我之
甚乎

一書中又曰、交際條約堅如金石、貴國所幹如
係約條、則從之、若或違畫約條、則斷不聽許、
此言遽聞之、則似有理、細察之、則不通之甚
也、何則、交際條約、盡起於兩國考察時勢、商
酌事體、以制其宜、苟守之利兩國、則當堅守
無違、若至時勢變事體革、守旧有障礙之時、
則不得不相共商議、以變通更革、我邦之文
貴國、以武將足利氏為始、其次豐臣氏、其次
德川氏、其間交際條約之廢通改革者、不遑
枚舉、是自然之理勢、不待智者而知也、今本

邦時勢大變、庶政一新、宗氏解州守之任、止
將命之職、更任外務大丞、則交際之體、亦不
可不變通、然而頑然拒之、曰、一違旧約、則斷
不聽許、無類膠柱鼓瑟之喻乎、以貴國之多
士、榮不通之論如此、甚堪怪訝、想托辭以欲
擯我絕交歟、

一書中又曰、有施措於國中之事、而其所施措、
或有不便於公議者云々、我國天子親政、
百度維新、是二千餘年、一系萬葉之國體、復
其古制、天地不易之一大盛事、其公明正大、

世界萬國之齊所欣慕拜賀也。今如書中所言，則貴國有以為尋常施措之事，誤之甚也。一書中又曰：不可容易議到之事，肆然欲行於隣國，寧有肯受之理乎？原夫我邦與貴國唇齒相保，三百餘年，貴國之幸福，即我邦之幸福。我邦之盛美，即貴國之盛美。是豈可不以事之實告事之實乎？願貴國得我邦之政體維新之報，宜有慶賀之意。今書中却加以肆然云々之語，是可謂隣誼歟？何不可言隣誼乎？

一書中又曰：沿革時務，則不論早晚，只當恭候處分。今問其早晚期幾年月，則曰：大事十年。若其緊急，則六七年，是亦何等無條理之言。夫隣國有報告之事，宜速達其書，以酬於來意。若其回答之旨趣，在貴國之所決耳。我豈為強之乎？唯天地間自有公論而已。今貴國以曖昧無條理之言，徒遷延歲月，春來未見一言一句答及於我，縷々傳致之情實者，豈可謂善隣之情誼乎？

一書中又曰：處分回下之前，允係交隣事務，遵

守曰約無一違畫然後可有公議決末之日
夫宗氏既解州守之任現任外務大丞及止
將命之職外務省管外國交際云々之事情
春來縷々陳述今不更贅使道不捧大丞之
書契不接大丞之差使却言九百之事遵守
曰約以既解之州守與不管之州人欺罔貴
國則貴國甘受其欺罔以為隣誼當然乎貴
國動輒曰誠信曰金石夫口稱誠信而行勸
欺罔貴國以之果為遵守曰約乎
一書中又曰無傷隣好可也是兩國蒼生之福

也我輩區々尽力專為之耳夫欲敦隣好久
遠不渝須言行一致差使超海以來貴國之
遇我無大反此語乎差使雖魯無安然待早
晚不可期之回答之理故直去此土至於東
京報超海以來貴國遇我之情狀於大丞如
異日來取確答仰大丞之慮分而已因托某
告別請亮之某以不肖任館司之職職關文
際是以春來頗竭微力於此因深觀貴國遇
差使之情狀有大反善隣之道者為兩國不
堪憂慮乃同差使直至貴府欲見使道以成

兩國之歆好然峻拒不接唯使軍官傳旨所
傳趣旨盡違文際之情理如右所論是以欲
去此土報告春來事情於大丞然人民尚有
滯於此土者不得管理故暫止行李急取
進退於大丞嗚呼事之至此可勝痛歎乎不
宣

右項稟告萊府使道前而後同告

釜山令公是希

因云方投此書彼云訓導受譴責而閉
居別差則闕官有一差備官耳而差備

官亦罹病且重大事件非差備之所任
故府使訓導等復職或新任下府者宜
待之而介還其書弘毅等退館後雖以
通事促之彼不肯受之竟委付通事然
而其書則府使訓導等果披閱者不待
言也

又云五月二十五日訓導來于草梁館
公談不決曖昧如例故留宿館中二十
六日夜半後訓導開道前往于東萊同
夜宿于賓日軒

所謂任所中六月朔日
別差官宅也

始入萊府。此間官民共遮路不能進。故
露宿云。且差使等出祭中。彼鎖館門不
許往來。又馳通事于草梁館。陰問以府
使面接之得失。一代官海津茂太郎等
即答以非所知矣。是其意在不令面接
而宗氏貿易苟引日。則已亦得浴其利
故也。

○同月吉岡弘毅森山茂草梁館ヨリ歸テ其委曲
ヲ具上ス廣津弘信ハ對州ニ在テ韓國ノ動靜
ヲ察シ以テ省命ヲ待ツ相良正樹モ歸テ對州

ニ留レリ後チ八月ニ至テ正樹出仕ヲ免ス

○七月草梁館内三大廳六行廊ト稱スルモノ九

棟アリ即チ朝鮮政府ノ經營ニシテ宗氏ノ使

臣ヲ待ツノ客舎ナリ彼ヨリ其一棟破損ニ至

ルヲ以テ之レヲ撤却セントス乃チ陪小通事

崔在守

在守有奸才者也。訓導俊卿漸以兩間之

之利而為高路之鎖鑰。其奸黠酷薄。苦我商

民者實大矣。明治七年八月繫于東萊府獄。テ

テ之レヲ言シム。因テ館司ヨリ訓導等ノ書面

アラサル時ハ輕易ニ聽許ス可ラサルヲ以テ

セシム。彼云過日入府ノ事館司ノ職宜ク為ス

ハカラサル所ナリ故ニ以後我レニ於テハ館
司ヲ認メス以テ其言ヲ傳ヘ難シト竟ニ通事
ノ書ヲ納テ其事ヲ諾ス乃ハ夕之レヲ撤却セ
リ
本府使道分付内西館西大廳西行廊今既毀
傷將有頽地之慮別遣監色方以毀撤地瓦與
材木一々照敷待公幹次未間封置於西廳空
舍而以此亦為於傳語官俾無後慮之意教辭
截嚴故如是仰陳須以諒之焉

壬申七月十九日

陪通事 中印

傳語官僉公

○八月十八日外務大丞花房義質岡山縣士渡韓ノ命
ヲ奉シ森山茂時為外務少記及廣津弘信時為外務少記等亦
コレニ伴行シ外務少録奥義制青森縣士草梁館ニ
駐留スルノ命ヲ拜ス是ヨリ先キ外務卿副島
種臣佐賀縣士戊辰以來朝鮮政府ノ我誠意ニ酬ヒ
サル件々ヲ條陳シ因テ將來處置ノ目的ヲ達
センカ為メ特別官負ヲ差遣スルヲ上請ス此
ニ於テ種臣勅ヲ受ケ處断ノ條目ヲ義質ニ委
任ス

外務省

一明治戊辰宗對馬守旨ヲ奉シ大差使ヲ派
 シ隣誼ヲ修メンコトヲ告ク其書中政權一
 帰皇室不佞嚮奉勅左近衛少将平朝臣某
 禮曹参判公等ノ語アリ然ルニ彼謂右皇
 室奉勅之字ハ兩國書契中未タ之レヲ用
 ル者アラズ左近衛少将平朝臣モ先規無
 之押印約ノ如クナラス禮曹参判大人ト
 書スヘシトテ接受不致候事
 一其後談判度重リ庚午二月ニ至リ東萊府
 使尚又單簡ヲ以テ大差使ヘ遣シ皇勅等

之字ヲ論難致候事

一然レトモ左近衛少将ノ稱呼丈ヶハ承知
 致候事

一皇勅等ノ字句ヲ用ヒス兩政府不差碍様
 ノ法語ヲ用ヒ交際ヲ收メハ可然哉ト訓
 導談合ノ未書信ヲ作り同十月外務官負
 等渡韓候ヘトモ訓導一應ノ面晤サヘ許
 シ不申候事
 一辛未六月我漂人數名ヲ和館ノ前岸ニ放
 置候事

一宗對馬知事書ヲ東萊釜山兩使ニ送りテ
 外務官負ニ款接セラレシテ請ヒ候ヘ
 凡承知不致旨返簡差越候事
 一同人對馬藩知事ヲ止ラレ更ニ外務大丞
 ニ任セラレ兩國間交際ヲ掌サトルヘキ
 旨ノ告書并外務官負等東萊釜山兩使ニ
 面晤ヲ請フノ書簡ヲ送レリ始メ遣セシ
 大差使ハ四年ノ時月ヲ費シ歸國候事
 一新差使等著韓ノ日ヨリ訓導ニ應接ヲ懇
 求スルヲ殆ント二十回ニ及フト雖凡其

終上京致候事

一別差下来候ニ付兩書契ノ寫ヲ寄附シ速
 ニ回答アラシトヲ求ルニ三十餘日猶豫
 アリ度段申出候事
 一右期日ヲ過テ廿五六日後ニ至リ訓導下
 来申出候ニハ公幹ノ事ハ議ヲ國中ニ收
 メ而後決答スヘク其期限ノ如キハ早晚
 歲月ヲ定ムヘカラストノ儀ニ有之候事
 一此上ハ親シク東萊府使ニ接シテ使節苦
 悶ノ情決答ノ大限ヲ約シ度ニ付訓導ニ

同伴開路候様申聞候處承諾ニ付差使館
司等東菜ニ入り面謁ヲ請ヘトモ許サス
軍官ヲシテ答ヘシメ候ニハ議ヲ國中ニ
收メテ後決答スヘシ惟恭テ早晩間ノ處
分ヲ竣ヘシトノ事ニ有之故ニ其早晩間
ノ期ヲ問ヘハ十年乃至六七年ト言フ因
テ其言フ處ヲ彼レニ筆記セシメ空シク
歸館候事

一右ノ情狀ニテハ假令十年ヲ期ストモ何
等ノ都合可相成哉此上ハ大丞ノ處分ヲ

取ルノ外無之旨ヲ告ケ差使等引取リ相
成候事然レトモ右和館ハ嘉吉以來我人
民往來我人民往來居住我國權モ行レ未
リ候處ニテ一朝打棄候ハ好マシカラサ
ル儀ニ付追テ使節差立談判相成マテハ
左件之通り取計候方方今ノ便宜ニ可有
之事

一草梁館司并代官所ハ打追之通相立可申
候事

一無用之士官雜人等ハ悉ク引纏メ歸國可

為致事

一商人ノ去留勝手タルヘキ事

一勘合印ハ旧章通り之事

一歳遣船ハ不差渡事

一歳遣滞品宗氏負債ト相成候分ハ勘定可

拂渡事

一對州滞居候漂民共ハ盡ク送り返シ候事

一右ノ目的ヲ達スヘキ為メ一時格段ナル

官負ヲ草梁館マテ差遣シ穩當處分可致

候事

明治五年壬申八月廿

外務卿副島種臣

正院御中

勅旨

外務卿正四位副島種臣

一草梁館司并代官所ハ従前之通相立置可

申事

一無用ノ士官雜人等ハ悉ク引纏メ帰國可

為致事

一商人ノ去留勝手タルヘキ事

一勘合印ハ旧章通りノ事

一歲遣船ハ不差渡事

一歲遣滯品宗氏負債ト相成候分ハ勘定可拂渡事

一對州ニ滯居ノ漂民共ハ尽ク返スヘキ事

一右之通朝鮮國出張外務大丞花房義質ハ可相違事

明治五年壬申八月十八日

奉勅 太政大臣從一位三條實美花押

因云義質委任狀條目不外于此故略之

修典館

○同日朝鮮語学所ヲ對州嚴原ニ設立スルノ議ヲ上申シテ許可ヲ得タリ

朝鮮語学之儀元嚴原藩ニ於テ從來世話致居候处當今廢絶相成候ニ付テハ過日未申上置候通り壹ヶ年凡三百圓位ヲ目的トシ嚴原於テ朝鮮語学所取設置候様致度右教授方之儀ハ是迄本省十一等出仕廣瀨直行儀此度出仕差免ニ更ニ同人ニ十四等官給ヲ賜リ教導申付為助教等外之者壹人差置可申候就テハ右御入用差向候分ハ此度持

官

越候御用金ノ内ヨリ一時仕拂ニ置カセ可
申ト存候此段相伺候也

壬申八月十八日 外務卿副島種臣

正院御中

附辭令書

伺之通

○八月二十八日新任別差玄大有東萊ニ著シ陪
通事ヲ以テ草梁館舌官ニ報告ス抑モ訓導別
差新任来ル時ハ速ニ来テ館司ニ會釋スルモ
ノ是例ナリ其故ヲ論詰ス彼レ答ヘテ嚮キニ

東萊府ニ前往スル以来館司ヲ認メス一代官

海津茂太郎即見前ヲ以テ館司ヲ假認スト云フ且九月

ニ涉ラ大有ヨリ書ヲ以テ其事ヲ證ス

因云宗氏家臣之在草梁館上自館司下至
水夫毎月供給薪炭者各有差而館司以前
往于東萊之故獨廢之不贈矣

覺

一自交隣和館設置以来各有職責從今做事
自在約條而向者不意公幹事主管差使之
攔出猶有乖戾此是當任不獲已之事也不

可煩究然至於官司之職任守其分内不出
館外事體固然而惹起分外之事和同欄出
究厥職分誠是違格如是分外施行之職萬
不當之意自京司有所截嚴之處分使道教
意亦有申嚴則當於任官之職何不奉承哉
事狀若是茲以仰陳以此須諒焉

壬申九月 日

別差大有玄僉知

一代官尊公

○九月花房義實等對州ニ着シ宗氏貿易署ヲ檢
シテ其簿記ヲ封シ再ヒ之レヲ旧吏ニ付ス尋

テ草梁館ニ達ス

軍艦春日號一隻汽船有先
功號一隻繫于釜山浦

代官所

宗氏貿易
事務所

ノ簿記ヲ查シテ之ヲ收ム又

在館宗氏ノ吏負ヲ沙汰シテ帰國ヲ命ス館司

深見正景ヲ以テ本省九等出仕ニ補スルノ令

書ヲ付ス而シテ館司故人如シ本省十一等出

仕廣瀬直行

嚴原縣士
善韓語

ヲ以テ一代官トシ奧義

制ヲ以テ學士兼監察トス其他命ヲ受ル各差

アリ館司等ノ名義ハ旧典ニ依リ彼レニ對ス

ル一時ノ稱呼ニシテ畢竟容レラレンコトヲ要

スルニ在リ同館ヲ以テ本省ニ轄スル者其實

館

コ、ニ始ルナリ

又一代官ヲシテ口陳書ヲ以テ宗氏負債品ヲ
查收アラシメテ彼レニ告ケシム而メ其償フ
ヘキ目録ヲ取ル別差亦書ヲ代官ニ贈リ其負
債ヲ償却スルヲ責ム偶而書同時ニ送シ其書
途ニ違ヒ意相符ス然レ此事彼レ素ト我カ其
物品ヲ備ヘサルヲ億測シ之ヲ名トシ以テ宗
氏ノ旧代官ヲ留メシトスルニ出ルナリ書ヲ
得テ彼レ果ノ愕然忽チ意ヲ轉シテ云理マサ
ニ宗氏ノ旧吏ニ就テ之ヲ領スヘシト事果サ

ス故ニ正景等ニ委シテ他日ニ讓ル

此時全羅道漂民十三名ヲ交付ス時ニ別差病

ト稱シテ来ラス乃チ書ヲ以テ其由ヲ陳ス

或別差就館領其漂民者是例也時訓導關官

口陳

宗氏解州守之任在何既不在於對州則如歲
遣貿易五亦不能循從前例格故且近年滯
物品之全額已送致於此在何今將互照數
檢清其出入以待公幹順成日在何又只重
累百年交誼之意也一以統冀斯速就館為查

官

收事

壬申九月十七日

宗氏負債品目錄

自己己巳年至辛未年未進上物未收記

一生銅五万四千五百六十一斤

一熟銅九千斤

一丹木七千五百九十斤

一胡椒四千七百七斤

一白砮二千六百斤

一蒔繪大硯箱二十二箇

一蒔繪華箋匣十三箇

一蒔繪無趺中圓盤

一蒔繪文匣一箇

一蒔繪七寸鏡五面

一蒔繪大層匣三次

一蒔繪中層匣三次

一黑漆華箋匣

一黑漆中硯匣一箇

一剪子四十五箇

一紋紙九百斤

全羅道
海州府
海州府
海州府

引自在^ユ在^ユ己^サ付^ル以^テ此^ノ深^ク量^シ如何^{ナリ}僕^ハ引^テ即^チ當^ル
下^ニ往^ク公^ノ幹^ヲ己^ハ付^ル互^ニ引^テ這^レ有^ル身^ノ蠶^ヲ己^ハ付^ル不得^ス
下^ニ往^ク己^ハ付^ル以^テ書^キ替^ヘ煩^ク互^ニ引^テ仔細^ニ回^シ示^ス己^ハ付^ル
付^ク為^ル此^ノ暫^ク上^ニ

壬申九月十八日 別差

全羅道濟州漂民壹名問情記

全羅道海南漂民九名問情記

全羅道濟州金寧漂民三名問情記

右三巡漂民托於貴衙事

壬申九月十日 一代官

別差大有玄僉知公

因云問情記略之不錄

傳語官 僉公前上

伊間日氣不調

僉公候予安^ニ互^ニ引^テ僕^ハ是^レ新^ク到^リ以後^ニ凡事^ハ

味^ハ例^ニ同^シ苦^シ中^ニ日^ヲ前^ニ為^シ始^メ病^ヲ症^ニ闖^リ癸^ノ振^リ起^ル難^ク然^レ己^ハ付^ル

是^レ是^レ悶^ク己^ハ付^ル第^ニ我^ノ國^ノ漂^ル人^ト既^ニ是^レ載^レ來^リ則^チ

事^ハ當^ル即^チ下^ニ去^リ捧^リ出^ス己^ハ付^ル到^リ事^ハ情^ハ如^ク右^ニ不^レ

得^ル下^ニ去^リ己^ハ付^ル書^キ付^テ成^シ送^ル己^ハ付^ル上^ニ座^ニ外^ニ坐^ル己^ハ付^ル

合^シ己^ハ付^ル外^ニ速^ク出^テ送^ル己^ハ付^ル道^ヲ己^ハ付^ル既^ニ己^ハ付^ル到^リ付^ク之^ヲ

海州府
海州府
海州府

佐州會

人命以老予許久弥留不合便宜且日默量措
處之道言專恃耳餘書病草不備暫上

壬申九月十八日別差

覺

一全羅道海南漂民九名

一同道濟州漂民三名

一同道同州漂民一名

右者捧授任所率去之事上

壬申九月十八日別差大有玄僉知印

大南文會代官

○偶上海新聞其他支那等以報知據ルニ朝鮮

國今年飢饉最モ甚シク餓莩路ニ横タハリ清

高ノ彼地ニ在リテ貿易ヲ為ス者米壹石ヲ以

テ一少婦ニ換フト云フ因テ外務卿種臣上書

シテ朝鮮國ニ周急スルヲ謀ル乃チ本省十四

等出仕竹内精三長野縣ヲ派シテ花房義質ニ

令ス時ニ義質既ニ草梁館ヲ去テ對州ニ在リ

即チ飛船ヲ發シテ其旨ヲ同館正景等ニ傳ヘ

テ彼國ニ告ケシム廣瀬直行町寧而シテ彼應

セス陪通事崔在守別差ノ意ヲ承ケテ八道歉

修地官

荒ノ處ナキヲ書答セリ義質ハ此答ヲ得テ復
命ス森山茂ハ對州ニ留テ韓語学所ヲ開キ遙
カニ草梁館ノ事務ヲ轄ス
別紙上海ノ新聞紙其他支那等ヨリノ報知
ニ當年朝鮮國ハ飢饉甚シク餓莩相望ハノ
由唯今當朝米穀餘アリ之レヲ以テ彼ニ輸
レ陽ニ隣國荒乏相救ノ意ヲ表シ陰ニ兩國
交際ノ路相開度同國ハ曾テ米佛等交通ノ
為メ充分尽力終ニ兵端ヲ開キ候迄ニモ立
至リ候得共人民頑愚固陋ノ風習ニテ于今

佐州會

孤立ノ姿ニ有之然ルニ飢饉ノ時ニ乘之之
ヲ名トシテ弥交通ノ路相開候上ハ皇國ノ
利ノミナラス各國ニ對シテ大ナル名譽ト
可相成幸ヒ花房義質彼地ニ差遣レ有之候
ハ別紙案ノ通り差贈リ彼官ニ照會セシ
メ候ハ、都合ト奉存候運輸ノ便ノ如キハ
大藏省へ御下議有之度候也

壬申九月二十三日 外務卿副島種臣

正院御中

壬申九月二十日横濱毎日新聞紙中

官

拔萃

高麗國(朝鮮是也)當時飢饉ニノ粒米珠ノ
 如ク野ニ青草ナク家室空虚國中ノ軍民
 人等徒ニ斃死ヲ待ツノ外他ナレ依テ國
 内貯蓄ノ糧米尽ク發シテ救済アレバ普
 ク充實スル事ヲ得ス右ニ付燕台境界ノ
 下商人此舉ニ乘シ米穀ヲ運輸シ賣却スル
 價ハ西人ノ金鋼石ヲ賣ル如シ錢貨ナキ
 者ハ婦女子ヲ以テ一斗ノ米ニ換ヘ其故
 察スルニ素ヨリ高麗對外國ト通商致

サ、ルヨリ貨物ノ融通ナシ支那人トノ
 貿易ト雖モ其境ニ深入ヲ許サス國法嚴
 禁ニシテ外ニ依頼スルノ勢ヒナシ今此
 荒凶ニ逢ヒ國中ノ飢饉ヲ見何ヲ前禁ヲ
 弛メ變通ノ辨チヲナシ飢民ヲ救ハスニ
 ハアルヘカラスト九月七日支那新聞中
 ニ見ヘタリ
 右支那原文之ヲ略ス
 壬申九月七日上海新聞
 高麗近事

支那新聞

西字新報云高麗國今年大飢餓餓餓相望固
不僅民有菜色而已也聞高麗朝廷已將民
間私藏糧米清查以為賑濟究黎之用華商
有在彼貿易者以米一石即可易一少婦於
此可見該處民人之苦矣西人論之曰救飢
之道首在招商販商販至則不患無糧而民
可藉以得食此理甚明也顧高麗偏處一隅
過於自恃不肯與西國通好以至外商裹足
莫肯前來而如此荒年徒恃國中區々儲積
能賑幾何吾恐其束手無策坐視其民之日

今轉於溝壑也豈不哀哉
以書柬令啟達候足下健勝逐日鞠躬其任ヲ
被陳候儀ト信據イタシ居候陳ハ近頃頓ニ
朝鮮國飢饉殊ニ甚シク餓餓相望トノ報ヲ
得タリ親カノ情實ニ痛哭悲歎ニ堪ヘス然
ルニ幸ヒニ皇朝當年天惠殊ニ深ク五穀豐
カニ實ルニ因テ速ニ朝廷ニ告シ大藏ニ謀
リ該朝我好意ヲ容レハ幾多人糧餉ト雖ト
モ其望ニ應シ十分ノ低價ヲ以テ之ヲ運輸
シ之ヲ販賣シ或バ貸附シ便宜一時ノ窮乏

官

ヲ充スルノ議ヲ起セリ固ヨリ射金ノ企ニ
非ラス實ニ隣近ノ際荒乏有無相救ノ厚意
ニ出足下幸ニ該境ニ在リ能ク其意ヲ體シ
懇ニ當路ノ官ニ謀リ速ニ回報ヲ送ラレヨ
百事固ヨリ整頓セリ唯其報ヲ待チ早晚直
チニ奏スヘキノ事不宜
明治五年壬申九月外務卿副島種臣
外務省外務大丞花房義質殿
因館中所言修告于別差令監主前矣答牌内
今見汝告則館中所言其在隣睦之義容或無

佐州館

惟我國穀產可謂天下所稱而雖有某處歉荒
其船以漕之人以負之素無窘迫之端自是已例
也況且今年八道均平無歉荒之處而如此浪
宗說徒何播聞乎非但此事有急相孚交隣間宜
十為之事而至於此事本無可處之端則此事實
傳致館中為可為可云々

壬申十月十八日 陪通事崔在守印

○十月安俊卿訓導ノ職ニ復シ東萊ニ下ル病ニ
托シテ草梁館ニ就カス通事崔在守ヲノ廣瀨
直行ノ一代官ニ轉スルヲ賀シ併テ公幹ノ如

佐州館

何ヲ問ハシム直行答ヘテ未償品ヲ查收スル
 ヲ請フト云フ彼又聞ク在館ノ吏負ハ皆朝官
 ニシテ償品モ亦朝廷ヨリ出ルト則チ敢テ受
 納スルノ理ナシ固ヨリ懇親ニ出ル時ハ宗氏
 ノ力足ルヲ待テ之レヲ受ク可シト云フ
 ○十一月二日草梁館代官ヨリ書ヲ訓導ニ投テ
 宗氏未償品ノ查收ヲ促カス訓導答ヘス而シ
 テ在守ハ訓導ヨリ示サル所ノ書ヲ攜ヘ来テ
 其不應ノ意ヲ陳ス
 訓導令監前入納

何州
 何州
 何州

即惟日
 起居何如アテレマニルカハ僕等僅過マアリマニルト云
 抵近年來別幅及貿易未收物品全數出送
 在イタサレクルニヨリ以イタサレクルニヨリ小通事崔在守互往復イタサレクルニヨリ
 其意ニイ不捧之意ニイ互回答ニイ於我ニイ未可曉
 其意ニイ以ニイ莫重ニイ物品既為出來則途
 即出送ニイ宜當ニイ工專ニイ茲書告ニイ
 上座ヨリ申サレマ列レタニヨリ工ニイ以此暫上
 壬申十一月初二日 代官中
 崔在守 回見

何州
 何州
 何州

告意覽悉而進上物種捧上事屢度言詰然這
間事情彼此有稔知之理也言語往復不必長
語而况苦之不為給文字汝等何以後中書傳
乎此不可定理之事則切勿施行可也別堂所
在衾褥與諸具使柴軍一々照數上送亦可也
不具

壬申十一月初二日 念恩堂

因云念恩堂者訓導居處之號也

○同十九日本省八等ヨリ十五等ニ至リ

即判
任也朝

鮮國駐勤ノモノニ限リ旅費定則中外國行日

當及著後六十日內支給ノ分ヲ合シテ一日ノ
食料トシテ下給セシテ上申シ明年二月ニ
至テ許可ヲ得タリ

朝鮮國へ一時出張申付候當省官員彼地逗
留中御手當ノ儀是迄外國行日當ノ外賄料
一日一人洋銀三弗宛大藏省掛合濟ノ上受
取來候處今般同國草梁公館宗重正ヨリ受
取彼我接對向ヲ始人民取締等ノ為メ當省
官員夫々在勤被仰付候ニ付テハ一時出張
ノ者ト違ヒ彼地在留候上ハ御手當賄料往

朝鮮國
食

官費ニ致シ置候テハ自然御入用相増候
 姿ニ付清國在留官負御手當表ニ準シ可相
 窺之處同國ノ儀ハ貿易盛大且各國領事彼
 地方官等ノ接待隨テ盛ニ有之朝鮮國ノ儀
 ハ未ク其勢ニ不立到當分之處清國御手當
 ニテハ過等ト存候間賄料等格別相減草梁
 公官在留之者ニ限リ外國行日當御手當之
 外著後六十日內ノ御手當ヲ更ニ賄料トシ
 テ被下右ヲ以テ為取賄候様可致尤追テ彼
 我形勢變革ニ隨テ更ニ可相伺ト存候依之

別紙相添此段相伺候也

壬申十一月十九日 外務卿副島種臣

正院 御中

朝鮮草梁公館在留官負御手當高

一ヶ月

一金七拾五圓 八等

此譯

金四拾五圓 外國行日當

但一日金壹圓五拾錢ノ三十日分

金三拾圓 賄料

官

但旅費定則國內旅行著後六十日間旅中滯留迎回
中滯留共一日金壹圓？三十日分

一ヶ月

一金六拾九圓

九等

此譯

一金三拾九圓六拾錢

外國行日當

但一日金壹圓三拾錢？三十日分

金三拾圓

賄料

但前同斷一日金壹圓？三十日分

一金六拾九圓六拾錢

一ヶ月

一金六拾圓

十等

此譯

金三拾三圓九拾錢

外國行日當

但一日金壹圓拾三錢？三十日分

金貳拾六圓拾錢

賄料

但前同斷一日金八拾七錢？三十日分

一ヶ月

一金五拾六圓

十一等

此譯

金三拾圓

外國行日當

但一日金壹圓ノ、三十日分

金貳拾六圓拾錢

賄料

但前同断一日金八拾七錢ノ、三十日分

ノ金五拾六圓拾錢

一ヶ月

一金四拾九圓

十二等

此譯

金貳拾六圓四拾錢

外國行日當

但一日金八拾八錢ノ、三十日分

金貳拾貳圓五拾錢

賄料

一金三圓

但前同断一日金七拾五錢ノ、三十日分

ノ金四拾八圓九拾錢

一ヶ月

一金四拾五圓

十三等

此譯

金貳拾貳圓八拾錢

外國行日當

但一日金七拾六錢ノ、三十日分

金貳拾貳圓五拾錢

賄料

但前同断一日金七拾五錢ノ、三十日分

ノ金四拾五圓三拾錢

金庫

一ヶ月

一金三拾四圓

十四等

此譯

金拾八圓九拾錢

外國行日當

但一日金六拾三錢ツ、三十日分

金拾五圓

賄料

但前同断一日金五拾錢ツ、三十日分

金三拾三圓九拾錢

一ヶ月

一金三拾貳圓

十五等

此譯

金拾七圓拾錢

外國行日當

但一日金五拾七錢ツ、三十日分

金拾五圓

賄料

但前同断一日金五拾錢ツ、三十日分

ノ金三拾貳圓拾錢

右之通在留中月割御手當被下賄之為ノ雇
入候奴僕給料并製事道具卧具拜借居宅小
破管繕等ハ総テ可為自費事

但郵船并渡海船賃ハ官費彼地往返日

數ハ定則日當ノミ賜リ彼地到着十五
日以前ハ本文月割御手當全數十六日
後ハ半數ヲ賜リ候事

辭令書

伺之通

明治六年二月十日

同六年

癸酉 五年十一月有廢大陰曆用大陽曆之
令而以十二月三日為一月一日之期

○一月二日慶尚道ノ漂民三名對州ヨリ草梁館
ニ送達ス之ヲ交付セントシ書ヲ投シテ訛別
來館ヲ請フト雖モ寸書ノ酬ユルナク謾リニ

通事ヲシテ之ヲ率ヒ去ラシメントス故ニ姑
ク漂民ヲ館ニ留ム同四日ノ夜俄ニ船ヲ前灣
ニ破リ殆ト死ニ濱スル者アリ其叫號ニ依テ
困難船ナルヲ認メ急ニ夫卒ヲ祭シテ之ヲ救
護ス七命共ニ無恙ヲ得タリ此レ慶尚道固城
ノ居民ナリ翌日彼レニ報シテ前ノ漂民ト併
テ交付セントシ彼レ亦礼遇セズ亦唯通事ヲ
シテ率ヒ去ラシメントスルノミ且東萊府使
通事ニ傳令スル所ノ書傳令書一覽
之後斥還之ヲ携來テ
示セリ竟ニ漂民留館月ヲ逾ルニ至ル

訓導

兩公前

別差

即辰

兩公候平安テマラレモヒアサルカク人ノ僕等僅過シ

トハ貴國漂民護送出來イタクルヒ人ノ力ヲ用シ兩

公ノ以下來就館カレマセトハ出送即次ニ己面議

トハ貴國イタクステアサリアシヤクトハ專為暫上ス

壬申十二月初五日 一代官中

東萊府傳令于通事書

本府使道招致首通事及知事陪通事分

付内外同載漂民三名ニ工ヲ到館多日ノ外尚

無出門之舉論シ工又况今見守門將告目

則固城商賣船七名一隻ニ來到牛岩浦ニ

牛下碇留連シ工初五日夜外風濤大作

不能制船絕纜轉リ于館船艙東邊外石築

亡シ船隻觸石破傷シ工人命登築俱全ニ而

黑夜中不知東西之際外適見燈火始覺有

人家ニ工挺身出言シトハ引救我人命ニ亡シ

高声大呼則館人幾名ハ出往前導入于家

中ニ亡シ濕衣曝乾一返煎粥救護シ工仍為

留置云云人命所在如是相救亦實
欣幸以設或自前民船湮沒之境非當
非館人出船救活之時仍為出送于
守門之使即發送之令於右名之
何不趁即發送如此新持留置亦是何
事体耶凡於事已論之除弊而歸順
之理勢固然也今以不然之事豈故
為生事之莫知其端以任官許往復之節
以請座之說之驟悉於任官稟告中
到今不然之端之和館比前有異之工與受

相阻之非如前不行之由已有所
洞燭之中以任官以豈敢有自行自止之理
乎朝令鄭重下以不可以自下擅便也
無益之我人亦已欲試而執留之萬不近理
以這間事狀之已汝等以當有詳知母敢
隱諱之工這々發告之其間
事之論詰之由已一々告達則分付内外
已往之事不必長言以以外自外少欠
之端皆以無罪之我人亦已空然執留亦
反為有損於當初相救之意也亦究厥事体

他
食

官

引寧容若是引立事當從此歸竟斗已道理
互引因於一事而相損以有欠於事面故姑
為默置^ヲ立^レ引命之係閑莫測^ル朝暮^ト雖
有看審救護^ト互何能決識於來後傷損之
理乎為若^レ有不然之端^ト互館中必無不
知之理^リ惟意為之意^ト互汝等言說^ト互消詳
曉諭可也^ト教是故如是布陳耳

十二月初八日

○二月十三日前ノ漂民等十名夜ニ乘レテ草梁
館ヲ脱ス翌朝彼レニ告ク又其遺物ノ目錄ヲ

彼レニ投レタリ後々東萊府ノ軍官二名來テ
之レヲ論詰ス若シ國內得ル所ナキ時ハ館中
必ス擔當スヘシト我其既ニ彼レカ奸計ニ出
ルヲ知ル即チ答テ云貴國ノ民ニシテ貴國ニ
走ル他ニ得ルノ理アラシヤ他日其跡ヲ驗ス
ルニ方テ敢テ報告ヲ煩ハスト故ラニ意ト為
サ、ルガ如クス

訓導 兩公前

除式

自本邦還送昌原民三名及於館前所拯固

城民七名以乘夜脱走を以 兩邦議講節

次中若此を以猥濫を實を對 兩邦之

惶悚を事端以以之請以以查覈を以有體

川 處置是希專此暫上

癸酉正月十七日 代官中

漂民遺物目錄書

記

一錢 百貳拾七文

一傘 六本

一半紙 貳束

一上衣 貳ツ

一揮頃 帽子ノ事 壹ツ

一斧 壹丁

一鎌 貳丁

一鑿 壹丁

一小手斧 壹丁

一叭 壹ツ

ノ拾品

右

一錢 五拾六貫貳百拾七文

一 鋸

壹枚

一 下袴

貳ツ

一 上衣

壹枚

一 烟管

壹本

一 風席

四枚

一 匙

七柄

七品

右昌原民三名館前所拯固城民七名正月十六日夜脱走後遺物如此

癸酉正月十八日印 一代官

代官中

因云此書用大陰曆者所以有故未告大陽曆于彼也

○同十四日本省七等官

即奏任也

朝鮮國ニ駐勤スル

ヲ以テ嚮キニ許可ヲ經ル所ノ判任官ニ支給

ノ例ヲ以テ賜ハリ且州ニ退テ駐勤スル時ハ

定則中着六十日前後區別ノ成規ヲ以テ賜ハ

ルヲ聽許セリ

當省七等出仕廣津弘信儀今般朝鮮國ニ在

勤被仰付候ニ付テハ滯留中日當御手當賄

料等、儀今般同所詰判任官ノ者ハ被下候
月割御手當伺濟ニ基キ別紙調書之通被下
度且御用都合ニ寄リ對州ニ引取滯留罷在
候節ハ御國內出張ノ儀ニ付著六十日前後
之區別ヲ以テ御規則之通御渡相成度可然
儀ニ候ハ、右之趣大藏省へ御達被下度此
同段相伺候也

明治六年二月

外務卿副島種臣

正院

御中

朝鮮國草梁公館在留御手當

一ヶ月

一金百五圓

七等出仕

廣津弘信

此譯

金五拾貳圓五拾錢 外國行日當

但一日金壹圓七拾五錢二分

金五拾貳圓五拾錢

但御國內旅費著後六十日間旅中滯留地中
滯留共一日金壹圓七拾五錢二分

一對州滯留中ハ著後六十日内外之區
別ヲ以テ御國內並旅費日割ヲ以被

下候事

一渡韓中前書日當賄料等月割ニ仕替
御手當被下候上ハ都テ今般判任以
下御手當伺濟之規則ニ照準取計可
申事

右相伺申候也

明治六年二月

辭令書

伺之通

明治六年二月十四日

○同月大陰曆ヲ廢シ大陽曆ヲ用フル事ヲ朝鮮
國ニ告ク

因云以大陽畧曆付于陪通事更口譯傳
我改曆之意

○三月十三日陪通事草梁館ニ来リ云ク嚮キニ
脱走ノ漂民其蹤迹ヲ得テ嚴囚セリ願クハ其
遺物ヲ收メント因テ目錄ニ照シテ之レヲ遑
タレテ其證書ヲ納ル

覺

昌原漂民三名

固城破船民七名

右者合十名、以我正月十六日夜、脱走館中、
二月初八日、見捉于各該邑、嚴囚、故不得送
還館中、而小々之錢與雜物、依記錄擔當棒
出之事、

癸酉二月十五日陪小通事印

○四月廣津弘信時為七等出仕草梁館総轄ノ命ヲ奉シ

テ任ニ赴ク奉命在二月也而シテ對州駐勤森山茂時

七等出仕ヲシテ歸京セシム又館司九等出仕深見

正景ヲ廢シテ十三等出仕ニ補シ對州在勤ヲ

命ス不日ニシテ之レヲ辭ス

○同月三越則兵衛ノ支店ニ属スル小賈加藤勝藏上村

角藏字野倉吉對州商戸三木某ノ名ヲ借リ所以成規除對州人

民外未能渡韓也草梁館ニ到ル韓人早ク其實ヲ認メ

甚ク之ヲ忌ミ一層商路ヲ壅閉スルニ至ル

○同月又宗氏負債品ヲ查收センテ促カレ且

ツ理ノ我可償シテ彼可領ヲ諭スト雖モ依然

トシテ應セス故ニ然ラハ則チ其品物ヲ倉庫

ニ藏蓄シ以テ他日貴國ノ需ニ應スヘシト結

言シテ復々議セス

因云還却宗氏負債品及圖書三顆義達萬松院以所庵

而追收駕船價米宗氏護送彼等則九年四月

贈書于東萊府使而命草梁館駐勤之輩以措

辨如左

記

一生銅 五万四千五百六拾壹斤

一熟銅 九千斤

一丹木 七千五百九拾斤

一胡椒 四千七百零七斤

一礬白 貳千六百斤

一蒔繪大硯匣 貳拾貳箇

一蒔繪箋匣 拾三箇

一蒔繪無趺中圓盤 貳軀

一蒔繪文匣 壹箇

一蒔繪七寸鏡 五面

一蒔繪大層匣 參次

一蒔繪中層匣 參次

一黑漆華箋匣 壹箇

一黑漆中硯匣 壹箇

一剪子 四拾五箇

卷之四

一 紋紙

九百斤

一 手燭

三箇

一 朱竿烟器

壹百五拾箇

結

是レ已巳年ヨリ辛未年ニ至リ宗氏貿易上
マサニ償フ可キ物品ニ係ル今數ヲ照ラシ
送致ス毫モ遺漏ナレ宜ク更ニ查收アル可
シ之レカ為ニ印記ニ永ク以テ證トナス

大日本國

明治九年四月日

外務權大丞森山茂印

大朝鮮國

東萊府使洪閣下

譯漢文

記

一 生銅

五万四千五百六拾壹斤

一 熟銅

九千斤

一 丹木

七千五百九拾斤

一 胡椒

四千七百零七斤

一 礬白

貳千六百斤

總領事館

一 蒔繪大硯匣	貳拾貳箇
一 蒔繪箋匣	拾三箇
一 蒔繪無趺中圓盤	貳軀
一 蒔繪文匣	壹箇
一 蒔繪七寸鏡	五面
一 蒔繪大層匣	參次
一 蒔繪中層匣	參次
一 黑漆華箋匣	壹箇
一 黑漆中硯匣	壹箇
一 剪子	四十五箇

一 紋紙	九百斤
一 手燭	三箇
一 朱竿烟畧	壹百五拾箇

結

是係己巳年至辛未年宗氏貿易上可償物品
 今照數送致無毫遺漏宜有更查收為之印記
 永以為證

大日本國

明治九年四月 日 外務權大丞森山茂印

大朝鮮國

參事官

東萊府使洪閣下

證

一宗義達圖書

一顆

一以耐菴圖書

一顆

一萬松院圖書

一顆

右今還却シ了ル宜ク查收アルヘシ之レカ
為ニ券契ヲ互換シ永ク以テ證ト為ヌ

大日本國

明治九年

月

日

外務權大丞森山茂印

大朝鮮國

東萊府使洪閣下

證

一宗義達圖書

一顆

一以耐菴圖書

一顆

一萬松院圖書

一顆

右今還却了、宜有查收、為之互換券契、永以為
證

大日本國

大日本國

明治九年 月日 外務權大臣森山茂印

大朝鮮國

東萊府使洪閣下

記

一白米 三百六拾石

庚午辛未二個年分駕船價米ノ内例

ニ依リ兩任官ノ遣銀ヲ扣除シ應ニ

收受スヘクシテ未タ受サル殘額如

是

一白米

拾九石貳斗九升七合四

庚午辛未二個年分一特送使及七副

特送使白蛤價米應ニ收受スヘクシ

テ未タ受サル殘額如是

一大豆

三拾石五斗貳升九合五勺

戊辰年條應ニ收受スヘクシテ未タ

受サル全額如是

是宗氏交際中例ニ貴國ヨリ應ニ供贈スヘ

クシテ未タ供贈ニ及ハサル全額ナリ今數

ヲ照シ查收シ毫モ遺漏ナシ之レカ為メ印

管

記レ永ク以テ證トス

大日本國

明治九年 月 日 外務權大丞森山茂印

大朝鮮國

東萊府使洪閣下

記

一白米 三百六拾石

康午辛未二個年駕船價米内依例扣

除兩任官遣銀應收受而未受殘額如

一白米

一白米

拾九石貳斗九升七合四勺

康午辛未二個年一特送使及副特送

使白蛤價米應收受而未受殘額如是

一大豆

三拾石五斗貳升九合五勺

戊辰年條應收受而未受全額如是

是係宗氏交際中、例貴國應供贈而未及供贈

全額、今照查收、無毫遺漏、為之印記、永以為證

明治九年 月 日

大日本國

外務權大丞森山茂印

外務權大丞森山茂印

大朝鮮國

東萊府使洪閣下

因云九年五月十四日訓導玄昔運來草
梁館山之城祐長談以前件而還其圖書
昔運云僕令將上京歸朝不遠願歸後辦
之如其圖書則假遞領受之證他日以府
使之印記替之即聽之後六月七日別差
李濬秀來館致府使領圖書之證

宗義達圖一顆

以酌菴圖一顆

萬松院圖書一顆

右依送還收取之以此憑考者

丙子五月十六日

大朝鮮國東萊府使洪祐昌

印

大日本國外務權大丞森山閣下

同七月十日別差李濬秀來館查收宗氏負債
品即假證之同十六日濬秀再致府使印記之

證

記

一生銅

伍萬肆千伍百陸拾壹斤

一熟銅

玖千斤

一丹木

參千伍百九拾斤

一胡椒

肆千參百參斤

一白礬

貳千陸百斤

一蔣繪大硯匣

貳拾貳箇

一蔣繪箋匣

拾參箇

一蔣繪無跌中圓盤

貳軀

一蔣繪文匣

壹箇

一蔣繪七寸鏡

伍面

一蔣繪大層匣

參次

一蔣繪中層匣

參次

一黑漆華箋匣

壹箇

一黑漆中硯匣

壹箇

一剪子

肆拾五箇

一紋紙

玖百片

一手燭

參箇

一朱竿烟器

壹百伍拾箇

結

是係己巳年至辛未年宗氏貿易上可償物
品、今照數查收、無毫遺漏、為之印記、永以為
證、

大朝鮮國

丙子閏五月二十日

東萊府洪祐昌

印

大日本國

外務權大丞森山閣下

因云十年一月二十三日、草梁館公信云、駕
船價米之事、依本館調查、則別有可徵米十

九苞餘、大豆三十苞餘者、嚮經照會之後、訓
導、玄昔運來請云、偶弊邦凶荒、願得以木綿
三匹、替米一苞收之、則幸甚、是以仰裁、同三
月九日、本省令之云、以木綿替米、是事情之
宜聽許者也、然要不失其價格、且遞之於內
地、則以販木綿之金、與以現品、唯依便宜耳、
其事替留未決矣、

○同月東萊府使ヨリ守門

彼設

立之將小通事等ニ令

書ヲ下シ以テ潛商ヲ禁止スルモノ二回之レ
ヲ門將直舎ノ壁ニ揭示ス彼此人民相往來シ

テ之レヲ經覽スルニ足ル而シテ其一ハ頗ル
我ヲ侮辱セリ

因云宗氏貿易廢絶後、總付人民自由、而彼
痛鎖商路、獨訓訓導俊卿、陪通事在守、欲私
壟斷之利、故益極苛察、兩間人民甚厭苦之、
竟至彼民水陸乘夜來商、是勢之不可已、而
所以我亦默許之也、方此時、貿易之數、夜商
者居十分之七矣、

東萊府使傳令書

近日彼我人相持、可以一言打破、我則一依三

百年約條、而彼之變不易之法、抑獨何心乎、事
若違例、則雖行之本國、亦所難強、而况可以行
於隣國、而唯意行之乎、彼雖受制於人、不耻其
變形易俗、此則不可謂日本之人、不可許其來
往我境、所騎船隻、若非日本舊樣、則亦不可許
入我境、馬州人與我和賣、本是一定不易之法、
則他島人交易、又我國之決不許者也、潛貨冒
犯、又兩國之所同禁也、近見彼人所為、可謂無
法之國、而亦不以此為羞、我國則法令自在、行
之我境之內、留館諸人、欲行條約中事、則皆當

聽施而欲行法外之事。則永無可成之日。雖欲
潛賣一物。此路終不開。我之守經奉法。彼亦想
無他說矣。須以此意諭於彼中頭領之人。使不
至妄錯生事。以有後悔。而汝矣。則與譏察諸校。
晝則秘密廉探。夜則水陸諸處巡行。守直更無
如前解弛之弊。是矣。若不恪勤舉行。至於現露。
則堂々三尺之法。先施於汝輩。苟欲保汝首領。
各別惕念向事。
癸酉五月日
馬州人通貨約條不可變而向來并禁以有其

故是在果今不必一例禁止。潛貨出入。一切嚴
因公蹟以門出入者。更勿禁止。使本約條中人
得安商業之地。宜當向事。

同十三 癸酉五月二十八日

○六月東萊府使潛商ヲ禁スルノ令書ヲ下シ
守門將ノ壁上ニ揭示ス

東萊府使傳令書

潛貨之來待近地者。歷々可數。必捨許入之路。
欲為冒夜犯禁者。不但民情狡惡。間雜之輩。與
彼人相接。國禁莫嚴。既知此輩之潛伏伺隙。其

所禁防之節不可不陪加嚴束痛絕此弊後已
各處輪番巡直各別措處是在果於物貨之由
門入者結束中數及每多奸欺之弊此亦一々
照檢數合則許入數溢則全數屬公更以此意
嚴明知委毋至抵罪之地向事

癸酉六月初三日

○同十三日韓國ハ尋盟高議之際通商ノ道甚夕
壅塞セリ因テ對州ヨリ朝鮮へ往來ノ船々ヨ
リ收税ノ義ハ追テ高路ノ開クルニ至ル迄廢
止アラシメテ上申ス後八月ニ至テ指令アリ

乃チ大藏省ヨリ其旨ヲ長崎縣ニ令ス

久米對州ノ人民朝鮮國草梁公館ニ在住商
業相營時々小艇來往イタレ候處宗氏旧交
通ノ項ハ別ニ船税輸入ノ格モ無之同氏交
通相止候末壬申九月長崎縣出張所ニ於テ
更ニ内地諸港へ往來スル船々同様ニ見做
レ浦方税則ニ照レ税金收入イタレ來然ル
處同冬海灣川江ノ船々解税云々ノ御布令
ニヨリ外往來船同様收税差免レ有之候處
近頃本縣ヨリノ差圖ノ旨ヲ以別紙掛合書

寫ノ通更ニ税金收入候ヨレ然ルニ此節ハ
公然タル通商ノ路モ壅塞ノ姿ニテ夜間潛
ニ商路ヲ通レ僅ニ商業取繫キ居候程ノ形
情ニ付外國輸出入ノ税法ヲ以テ納金為致
候テハ商人トモ益困却イタレ終ニハ往來
スル所ノ商船モ断絶ニ至リ可申方今尋盟
商議ノ際西民ノ情好ヲ固結セシムルハ必
ラスノ事ニテ右商路ノ通塞ハ内外民情ノ
向背ニ関レ可申殊ニ右來往船モ僅ニ十餘
里隔絶ノ地ニテ貿易亦一々年數万金ノ高

ニ踰ヘス章程モ未タ確立セサルモノニ付
當分ノ内内國航行ト同視レ追テ公然商法
相開ケ候マテ收税見合相成候様イタレ度
存候猶實地ノ形行ハ其懸リノ者出頭面陳
可為致候御聽容ノ上ハ大藏省へモ御達レ
被下度此段申上候也

癸酉六月十三日

外務少輔上野景範

太政大臣三條實美殿

別紙

諸物品輸出入ノ儀ハ令般御布令ニ付総

修史館

テ相廢之候處朝鮮國輸出入ノ儀ハ外國
同様ノ振合ニ付追テ御指令マテハ從前
ノ通税金收入可致旨本廳ヨリ申來候間
本行ノ處分取計候條此段為御心得申進
候也

明治六年四月十六日 嚴原出張所

草梁公館

御中

辭令書

上申ノ趣大藏省ハ別紙之通及指令候條

此旨可相心得事

明治六年八月三日

別紙

長崎縣管下對州高民朝鮮ハ往来船
收税ノ儀申上

長崎縣管下對州人民共朝鮮國ハ往来ノ小
艇積荷物品ニ應ニ收税致候儀當分廢除有
之度段外務省建議相添御下問ノ趣承知仕
候情檢考仕候處追々外國御交際ノ道相開
内地人民海外航行ノ起業隆盛ナラシムル

ハ現今ノ急務不俟論儀ニ有之然リト雖ト
モ朝鮮國ノ儀ハ方今尋盟御商議ノ際未タ
確然タル通商ノ御章程不相立然ルヲ同盟
各州同様公然不通ノ稅銀收徵航行為致候
儀ハ甚以テ不條理ノ次第有之況内國同様
ニ視做レ港内取締規則ニ照準取計候モ是
亦名義上ニ於テ不都合ノ儀ニ可有之到底
朝鮮國ノ儀ハ各國トモ違ヒ從前御通信有
之宗氏立藩ノ砌ヨリ引續内地人民彼地公
館内在留ニ付時々小艇ヲ以貨物搬運有無

相通シ候ト雖凡當時物品稅收ノ名義取糺
候儀モ無之只從前ノ慣法ニ寄リ來往致來
リ候儀ニ付追テ通信ノ方法御確定相成リ
何分ノ御沙汰御座候マテ寧口從前慣習ノ
倂御差置相成候方可然ト存候乍去右ニテ
ハ外國密輸ノ御懸念モ可有之候ハトモ蓋
シ其邊ハ縣廳ニ於テ豫防注意候ハ、敢テ
弊害モ有之間敷ト存候前條縷述ノ趣旨御
參考御聽容ノ上ハ別紙ノ通當省ヨリ同縣
ハ相違シ可申ト存候此段奉申上候也

大藏省事務總裁

明治六年七月廿二日 參議 大隈 重信

太政大臣 三條實美殿

長崎縣へ達案

長崎縣

其縣管下對州人民朝鮮國へ來往通商相
當候者ヨリ先般以來外國へ輸出入物品
同様收稅致し候旨朝鮮國草梁公館在勤
者ヨリ外務省へ届出候趣元來同國ノ
儀ハ締盟各國トモ違ヒ方今尋盟御商議

ノ際未タ通商ノ御章程無之然ラ各國
普通ノ稅銀致收徵候段甚夕以テ不條理
ノ次第有之去リ迎更ニ内國同様可見做
ハ是亦名義上不妥當旁以今般御詮議ノ
上追テ通信ノ方法御確定何分ノ御沙汰
候マテ輸出入物品稅相廢止総テ從前慣
習ノ方法ニ復シ不問ニ差置候様可被致
候尤自然奸猾ノ徒名ヲ同國輸送ニ附託
其實外國密送ノ弊可差生モ難計候條其
邊ニ至テハ豫メ不取締無之様注意可被

致候此段相違候事

七月

大藏省事務總裁參議大隈重信

辭令書

上申ノ通長崎縣へ可相違事

明治六年八月四日

○同月廣津弘信對州ニ歸リ宗氏旧貿易署殘品

支消ノ道ヲ謀リ兼テ痾ヲ養フ與義制ヲシテ

草梁館ヲ代轄セシム

○同月二十六日對州ニ在ル韓語学所ヲ廢シ更

ニ生徒七八名ヲ撰ニ草梁館中ニ修学セシム

ルヲ上申シ同館經費金五千圓中ニ於テ支給

スヘキノ令アリ

客秋伺濟ノ上對州表ニ於テ朝鮮語学所取

設置候処右ハ相廢シ更ニ朝鮮國草梁公館

ニ替古通詞相備生徒凡七八名在館修学為

致度候ニ付右入費ハ朝鮮假定額金之内ヲ

以テ取賄可申積ニ候就テハ是マテ對州表

語学所へ請取有之候一々年分定額金三百

圓ハ昨秋九月來仕拂來候ニ付追テ精算ノ

上大藏省へ引合可申候間此旨同省へ御達

之被下度此段申進候也

明治六年六月二十日 外務少輔上野景範

太政大臣三條實美殿

辭令書

上申之趣聞届候条自今韓語学生徒ノ諸費

ハ都テ草梁館歳費五千圓ノ内ヲ以テ相辨

可申尤韓語学所費用金三百圓ハ早々清算

ノ上勘定帳大藏省ハ可差廻事

明治六年七月八日

○八月三日嚮付ニ公布スル所ノ朝鮮國人及船

漂着ノ時處分ノ方法ヲ改正スルヲ布令ス

第二百八十二號

戊辰六月布告朝鮮國漂流人取扱規則第

二條左之通改正候條此旨布告候事

明治六年八月三日

太政大臣三條實美

一朝鮮人本邦ノ内所々ハ漂着候節ハ薩

摩肥前等長崎ニ便宜ノ地方ハ長崎縣

廳ニ送届佐賀縣下唐津ヨリ東北筑前

豊前長門石見出雲等其他諸州ハ漂着

ノ節ハ其所轄廳便宜ノ海濱ヨリ直ニ

對州長崎縣支廳ニ遞送可致事

○九月十三日嚮キニ對州船渡韓ノ際風勢ニ依

テ一時彼ノ地方ニ寄泊シ因テ所借ノ糧米ヲ

償却シテ其證ヲ取ル

因云對州船之往來于草梁館若為風波寄泊

彼地方則薪水固給又後其船之大小必與糧

米者是例也雖然我既照會訓別等以廢其例

且云如其數日阻風波而口糧闕乏則宜使船

主出其證以周急他日必償却之客歲以來有

船主借米于彼者雖如約謀償却彼不肯受而
至此始受之

覺

一白米貳拾五斗四勺

右昨年十一月玉浦漂泊一隻借來條

一白米捌拾貳斗五勺六勺

右同時玉浦漂到船一隻條

一白米壹斗四勺二合八勺六厘

右今年六月機張漂泊一隻條

合米壹佰玖斗三勺三合四勺六厘

參史

合右捧出之事

漂泊時料米貸去標紙往復該邑待其米到還為入

送之事

癸酉七月二十二日陪通事申印

金米吉印

代官僉公

因云彼云船主借米證書猶在漂泊之

境不能交換故令脚注也

○十月嚮キニ允ヲ得テ草梁館ニ於テ韓語學所

ヲ開キ官費生徒十名ヲ教育ス

○十一月七日鹿兒島縣下人民朝鮮地方ニ漂到

六月十八日漂到于全羅道加波島也スル者數名問情記ヲ付シ

テ草梁館ニ護送ス而シテ聞ク彼レ之レヲ厚

遇スト雖トモ敢テ遊歩ヲ許サス

一貴國薩摩州鹿兒島居民十名同駕壹船裝

載米太茶今年三月十九日發船四月初一

日到琉球那霸卸下所載之物換載黑糖薑

金回還本土五月初八日發船二十日到中

洋風雨大作不能制船漂蕩大洋二十四日

夜抵著一處大小船隻觸嶼破碎一名滄死

其餘九名攀陸得全而滄死一名二十五日

地方之多般拯出自願瘞埋其地乃濟州烏
卒浦云也七月十二日到待風所八月二十
五日發船次々替載今月十八日到此云々

金四 癸酉九月十八日 陪通事申印

崔在守印

覺

一日本國薩摩州漂民九名
右被護送領之事

明治六年十一月七日 陪一代官

任所

因云彼我漂民送受之節嚮生葛藤未
至立成規故我則付彼吏彼則遞我館
互取其證者姑立為小例也

○十二月廣津弘信草梁館駐勤ノ處七月以來允
ヲ得テ痾ヲ養ナフカ為メ對州嚴原ニ在テ遙
ニ該館ノ事務ヲ理ス此ニ至テ歸京ノ命ヲ奉
ス

